広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第46集

# 行年遺跡発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第46集
行平遺跡発掘調査報告書　正誤表

| 頁・行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| 2頁 | 第1図 | 第1図 |
| 3頁12行 | 住居跡外面 | 住居跡外側 |
| 26頁20行 | 逆糸文状の文状 | 逆糸文状の文様 |
| 図版1－b | 一b　遺跡近景 | b　同上近景 |
| 図版3－b | 同上調査区北側付近 | 同上調査区北西付近 |
| 図版4－b | 同上完掘状景 | 同上完掘状況 |
| 図版5－b | ＳＢ０２完掘状景 | ＳＢ０２完掘状況 |

# 行年遺跡発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

# 目　　次


（Ⅰ）　はじめに …… （1）

（Ⅱ）　位置と環境 …… （2）

（Ⅲ）　調査の概要 …… （5）

（Ⅳ）　遺構 …… （7）

（Ⅴ）　遺物 …… （20）

（Ⅵ）　まとめ …… （30）

（Ⅶ）　挿図 ……（33）


# 例　　言

1）本書は、昭和59年度に実施した団体営階見（しなみ）地区ほ場整備事業に係る行年（ゆきとし）遺跡の発掘調査報告書である。

2）発掘調査は甲奴郡上下（じょうげ）町から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3）出土遺物の整理・実測・図面の製図は鍜冶益生・佐伯博司が行った。

4）遺構及び遺物の写真は鍜冶が撮影した。

5）本書に使用した遺構略記号は次のとおりである。

　ＳＢ：住居跡、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝状遺構、ＳＩ：柵列、Ｐ：ピット

6）本書に掲載した第１図の地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の１（上下・府中）地形図を使用した。

7）本書の執筆は、鍜冶（Ⅰ）（Ⅲ）（Ⅳ）、佐伯（Ⅱ）が分担して行ない、鍜冶が編集した。

# 図 版 目 次

図版１－ａ　遺跡遠景（北東より）
１－ｂ　同上　近景（南より）
図版２－ａ　遺構検出状況全景（南より）
２－ｂ　同上　調査区中央付近（南より）
図版３－ａ　遺構検出状況調査区東側付近（北より）
３－ｂ　同上　調査区北西付近（南東より）
図版４－ａ　ＳＢ01　検出状況（西より）
４－ｂ　同上　完掘状況（西より）
図版５－ａ　ＳＢ02　検出状況（南東より）
５－ｂ　同上　完掘状況（北東より）
図版６－ａ　ＳＢ03　検出状況（西より）
６－ｂ　同上　炭化材検出状況（南西より）
図版７－ａ　ＳＢ03　遺物出土状況
７－ｂ　同上　完掘状況（西より）
図版８－ａ　ＳＢ04　完掘状況（西より）
８－ｂ　ＳＢ05・06　検出状況（西より）
図版９－ａ　ＳＢ05・06　完掘状況（西より）
９－ｂ　ＳＢ06　遺物出土状況（西より）
図版10－ａ　ＳＢ07　完掘状況（南より）
10－ｂ　ＳＢ08　完掘状況（南より）
図版11－ａ　ＳＢ09　完掘状況（南より）
11－ｂ　ＳＢ10　完掘状況（北より）
図版12－ａ　ＳＫ01～03　検出状況（南より）
12－ｂ　ＳＫ01・02　完掘状況（東より）
図版13－ａ　ＳＫ04・05　完掘状況（北東より）
13－ｂ　ＳＫ07～09・18　完掘状況（北東より）
図版14－ａ　ＳＫ07　遺物出土状況（北より）
14－ｂ　ＳＫ18　遺物出土状況（北より）
図版15－ａ　ＳＫ11　遺物出土状況（東より）
15－ｂ　ＳＫ12　遺物出土状況（南東より）
図版16－ａ　ＳＫ13　遺物出土状況（東より）

16－b　同上　完掘状況（東より）
図版17－a　ＳＫ16　遺物出土状況（南より）
17－b　ＳＫ17　遺物出土状況（南東より）
図版18－a　ＳＤ01・02　検出状況（南より）
18－b　同上　完掘状況（東より）
図版19－a　遺構完掘状況　調査区北側付近（東より）
19－b　同上　調査区東側付近（北より）
図版20　出土遺物（Ⅰ）
図版21　出土遺物（Ⅱ）
図版22　出土遺物（Ⅲ）
図版23　出土遺物（Ⅳ）

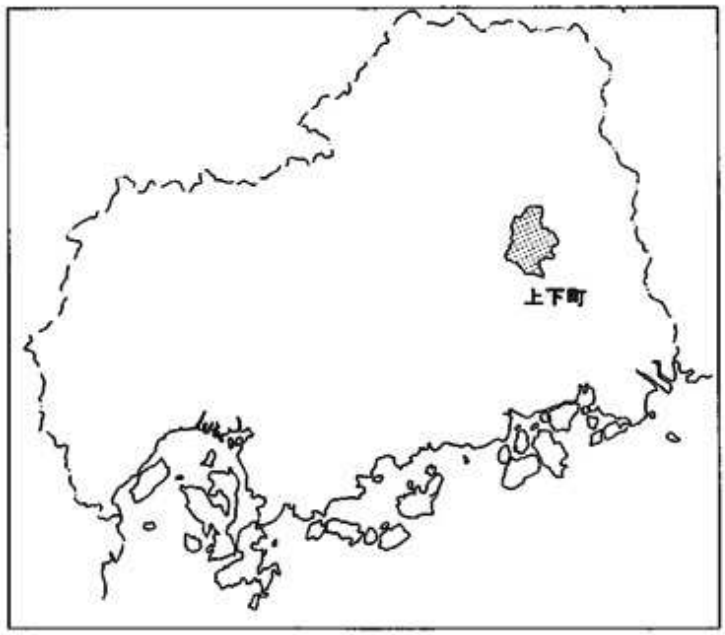
## 挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（１：50,000）……（２）
第２図　中居遺跡出土遺物（１：３）……（３）
第３図　遺跡周辺地形図（１：2,000）……（６）
第４図　遺構配置図（１：300）……折込み
第５図　ＳＢ01　実測図（１：60）……（７）
第６図　ＳＢ02　実測図（１：60）……（８）
第７図　ＳＢ03　実測図（１：60）……（９）
第８図　ＳＢ04　実測図（１：60）……（10）
第９図　ＳＢ05・06　実測図（１：60）……（11）
第10図　ＳＢ07～09　実測図（１：60）……（13）
第11図　ＳＢ10・11　実測図（１：60）……（14）
第12図　ＳＫ01・02・04・05・09・10　実測図（１：40）……（16）
第13図　ＳＫ07・11・14・15・16・19　実測図（１：40）……（17）
第14図　ＳＫ13・17　実測図（１：40）……（18）
第15図　ＳＤ01・02　実測図（１：60）……（19）

第16図　出土土器実測図（Ⅰ）（1：3）…… (21)
第17図　出土土器実測図（Ⅱ）（1：3）…… (23)
第18図　出土土器実測図（Ⅲ）（1：3）…… (25)
第19図　出土土器実測図（Ⅳ）（1：3）…… (27)
第20図　出土石器実測図（2：3）…… (28)

## 表　目　次

土坑計測一覧表 …… (15)



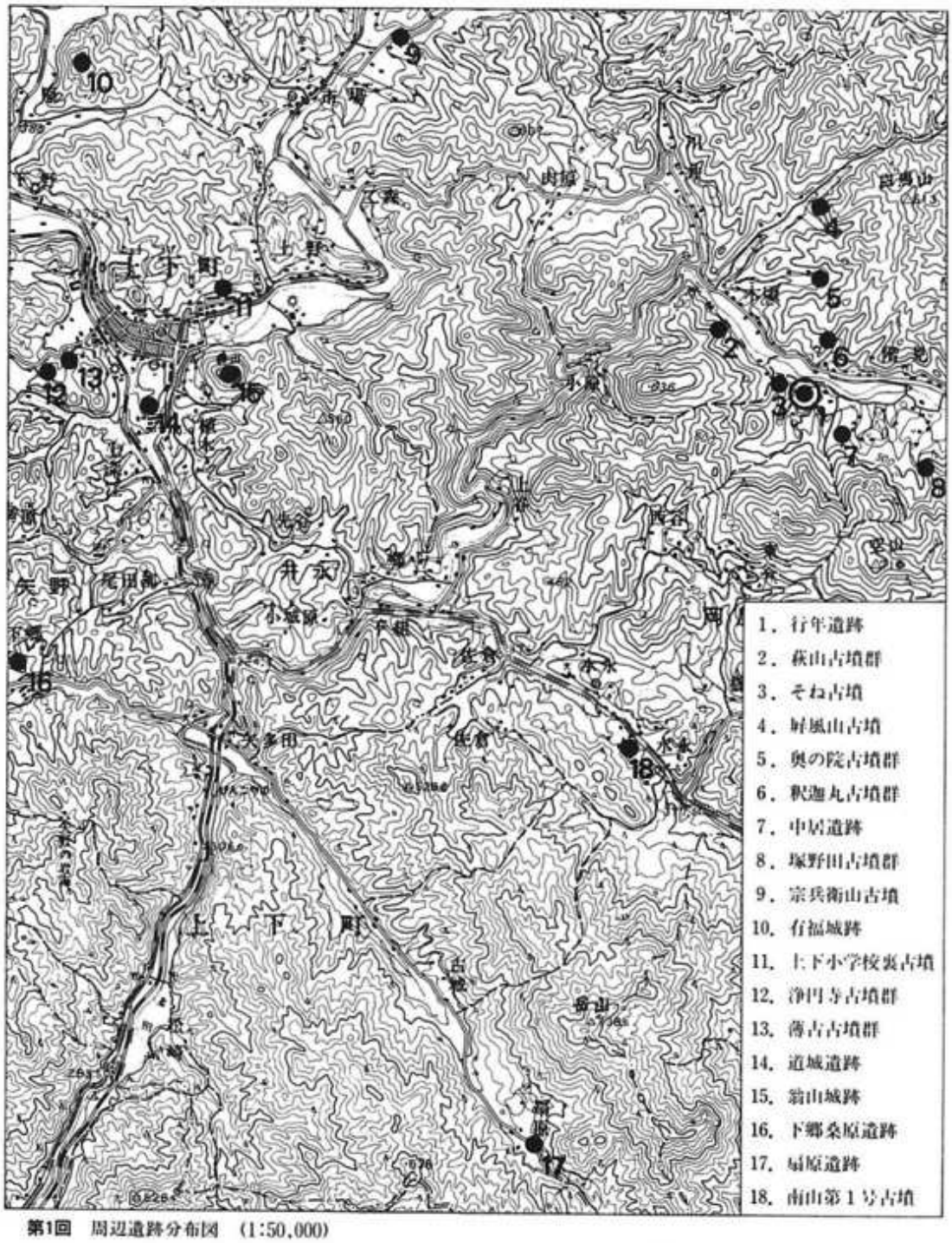
# （Ⅰ）　はじめに

甲奴郡上下町は、備南・備北を結ぶ交通の要地であり、近世においては幕府天領となり石州街道の宿場町として栄えた。階見（しなみ）地区は、上下市街地から東方約５㎞に位置し、神石郡三和町と境を接している。同地区は、矢多田川に沿って細長く東西に開けた盆地地形を呈している。耕地は急峻な山塊が迫るため主に矢多田川南側の低丘陵上及び谷部に開墾されていることから、可耕面積も狭いうえ、階段状となっている。このため農業の近代化、集約化を目的とした団体営のほ場整備事業が計画された。昭和56年11月、上下町から広島県教育委員会（以下「県教委」という）に対して同事業地内の文化財の有無ならびに取扱いについての協議がなされた。県教委ではこれを受けて同地区内の分布調査を実施して、遺跡の存在する可能性のある場所を３箇所確認し、その後、試掘調査を行って中居（なかい）遺跡、行年（ゆきとし）遺跡の存在を確認した。この結果、設計変更の可能な中居遺跡については計画変更するとともに、設計変更が不可能である行年遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存することとなった。このような経過を経て昭和58年10月、上下町から財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に発掘調査の依頼があったがセンターとしては昭和58年度における調査は他の事業との関係もあって、調査は不可能であったため昭和59年度に調査することで協議を行い、昭和59年10月１日から同年12月６日まで約２か月間発掘調査を実施した。なお、調査期間中の12月１日には午後２時から上下町教育委員会と共催で遺跡見学会を開催したところ、階見地区をはじめ町内外から約80名の参加者があった。

本報告書は、以上のような経過のもとに調査を実施した行年遺跡の記録を収録したもので、縄文時代から古墳時代にかけての当地域集落の在り方の一端を示す資料である。このような意味からも本報告書が単に学術研究のみならず、当地域研究の新たな資料として活用されれば幸いである。

なお、調査にあたっては上下町、上下町教育委員会、土地所有者の藤岡一夫氏の御協力を得るとともに、地元の方々から多大な御協力を得た。末筆ながら記して謝意を表したい。

## (II) 位置と環境




第1図　周辺遺跡分布図　(1:50,000)

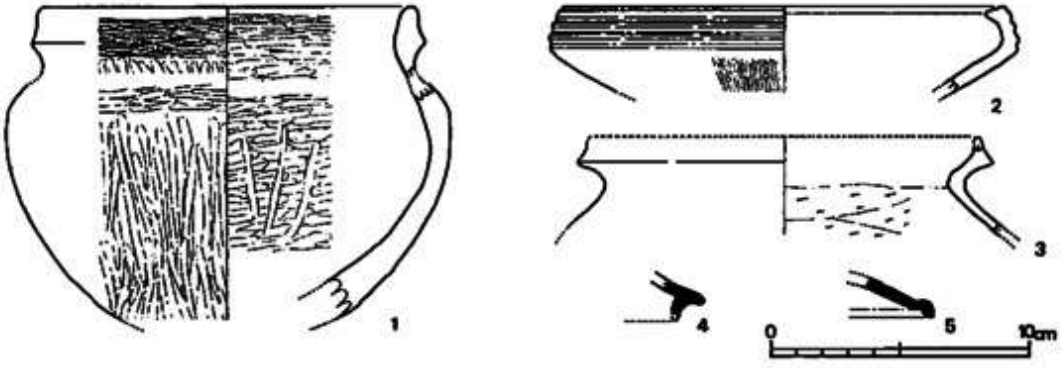
行年遺跡は、広島県甲奴郡上下町階見字行年1631番地外4筆に所在する。上下町は県東部、旧備後国のほぼ中央に位置し、平均標高約400mである。町の中央部には分水嶺が走り、町内を西流する上下川は馬洗川に合流ののち江の川と合流して日本海へ、一方町内を南流する矢多田川は芦田川に合流して瀬戸内海へ流入している。町内の大部分は山地形からなり、耕地・集落は小河川流域の平地や谷間にわずかに点在しているにすぎない。しかし、上下川沿いに発達した町の中心部は、近世には石州路の宿場として栄え、天領代官所が置かれて周辺地域の中心をなしていた。

以下、上下町内の遺跡を概観してみたい。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。縄文時代の遺跡としては、上下町最南端に位置し、前期～後期にかけての土器片、石鏃・刃器などの石器がかなり広い範囲にわたり採集されている扇原遺跡[1]が唯一の遺跡であったが、今回の調査において本遺跡からも遺物が出土した。なお、本遺跡の南東約5km、山地谷あいの標高約500mに位置する神石郡三和町柿の木原遺跡[2]では、後期の土器片が採集されている。

弥生時代遺跡としては、下郷桑原遺跡[3]、道城遺跡[4]、中居遺跡などがある。下郷桑原遺跡では中期後半の住居跡2軒、道城遺跡では後期の住居跡1軒が確認されている。また、本遺跡の南東約700m、矢多田川を臨む丘陵上に位置する中居遺跡は、昭和58年県教委が試掘調査を行い、中期後半～後期にかけての土器（第1図　1～3）が出土し、後期の住居跡2軒が確認されている。このほか、浄円寺古墳群の立地する西側丘陵谷部からは、中期と考えられる分銅形土製品[5]が出土している。

上下町では、現在約150基の古墳が確認されている[6]が、前方後円墳は数少なく大部分は横穴式石室を内部主体とする径10m前後の小円墳である。前方後円墳としては、全長24m、高さ3mで全長8.5mの横穴式石室をもつ南山第1号古墳、ともに全長22m、高さ3mの古城第1・2号古墳、全長28m、高さ5mの小塚中山第5号古墳などが知られているにすぎない。また、発掘調査された古墳としては、宗兵衛山古墳、上下小学校裏古墳、薄古第1・2号古墳[7]がある。宗兵衛山古墳は径約10mの円墳で、内部主体は横穴式石室で須恵器・金環が出土しており、6世紀後半頃の古墳と考えられる。上下小学校裏古墳も内部主体は横穴式石室で、須恵器・土師器を出土している。薄古古墳群は、径10m前後の小円墳5基からなる古墳群で、調査が行われ




第2図　中居遺跡出土遺物（1：3）

たのはこのうち２基である。第１号古墳は、背後に地山を掘込んだ周溝のある径6.5m以上、高さ0.6～0.8mの円墳で主体部は検出されていない。 第2号古墳は、径8mの円墳で内部主体は箱式石棺と土坑である。土坑からは土師器の細片が出土している。なお、第２号古墳は、古墳の築造、構築法や内部主体の状況などから６世紀初頭の築造とされている。

本遺跡の周辺には、屏風山古墳、そね古墳、奥の院古墳群、萩山古墳群、釈迦丸古墳群、塚野田古墳群が存在する[8]が、いずれも径10m前後の小円墳で、内部主体は横穴式石室である。なお、隣接している神石郡三和町にも、矢多田川沿いに別所古墳群、塚の鼻古墳群などの古墳群が存在している。

古墳以外の遺跡としては、下郷桑原遺跡で造付け石組みカマドを付設した住居跡が確認されており、国留先谷の岩風呂窯跡は須恵器生産の窯跡で数基が確認されている。

古代の遺跡としては、下郷桑原遺跡、中居遺跡などがある。下郷桑原遺跡では、平安時代初頭の倉庫跡と推定される１間×３間の掘立柱建物跡、溝状遺構などが検出され、瓦類、墨書土器を含む須恵器が出土している。また、中居遺跡においては、奈良～平安時代にかけての須恵器（第１図　４・５）が出土し、掘立柱建物跡が検出されている。

中世の遺跡では、有福城跡、翁山城跡などの山城跡、国留時鳥の宝篋印塔などがある。

以上、簡単に上下町の遺跡を概観してきたが、上下町における遺跡の調査例は少なく、原始・古代の様相は一部が明らかになっているにすぎない。

註　１．服部宜昭、妹尾周三　「甲奴郡上下町扇原から発見された縄文時代の遺物について」　『芸備』第６集　芸備友の会　昭和53（1978）年

２．三和町教育委員会　『広島県神石郡柿の木原窯跡の調査』　昭和53（1978）年

３．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『下郷桑原遺跡』　昭和59（1984）年

４．服部宜昭、「甲奴郡における弥生時代の遺跡と遺物について」　『甲奴郡文化財研究』　第２巻　昭和47（1972）年

５．鍜治益生　「甲奴郡上下町出土の分銅形土製品」　『ひろしまの遺跡』第７号　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　昭和56年（1981）年

６．上下町教育委員会発行の『上下町の古墳分布』によると、総数119基であるが、その後の分布調査で、昭和59年12月現在、新たに30基近くの古墳が確認されている。

７．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『薄古第１号・第２号古墳発掘調査報告』　昭和58（1983）年

８．上下町教育委員会　『上下町の古墳分布』　昭和56（1981）年

## (Ⅲ) 調 査 の 概 要

行年(ゆきとし)遺跡の所在する階見地区は、芦田川の支流矢多田川を挟んで北側は急峻な山塊が連なるのに対し、南側は標高715mの空山より派生した丘陵群が傾斜変換点から緩やかに展開している。行年遺跡は、南側の丘陵群のうちもっとも西側に位置し、前面を流れる矢多田川との比高差約15mの丘陵先端部に立地する。現状は水田で、調査対象地域は総面積約1,500㎡である。

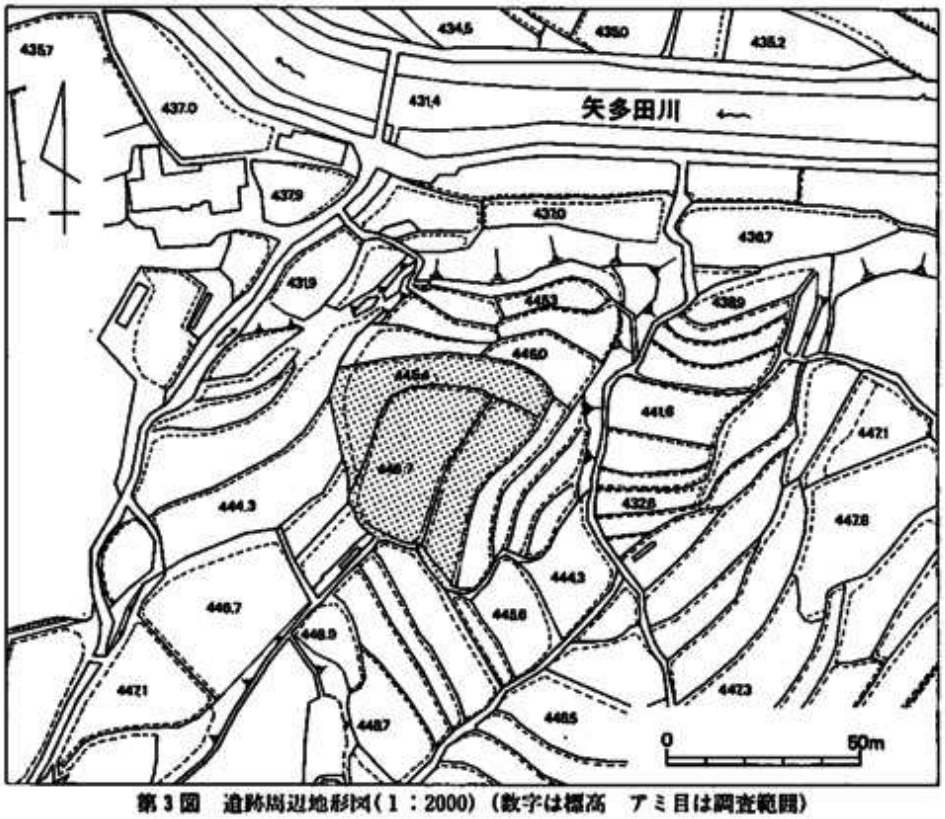
調査はまず調査区設定から開始した。調査区設定にあたっては、ほ場整備事業の計画線を考慮して調査区中央を貫く南北基線を設定し、この中間点から直交する東西基線を設定し、北東区から1区とし時計回りに2～4区と呼称することとした。また、調査地域が3段の水田にわたるため、この4調査区を水田別にさらに1－A～C区、2～4－A・B区と呼称することとした。耕作土の排除には重機を使用した。

排土の結果、耕作土・床土直下で地山を検出したが、調査区2・3区中央部は地山削平が著しく、角礫を露出する状況を呈し遺構の残存状況は極めて不良であった。検出の遺構にはわずかに壁溝、主柱穴が残存した弥生時代の円形住居跡2軒と、2間×2間の時期不詳の掘立柱建物跡1棟、そのほかに若干のピットを検出したにすぎない。また、東側・西側では本来の丘陵斜面となり、西側斜面部で弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡が切合った状態で2軒分検出した。ともに斜面に営まれているため遺存状態はよくない。

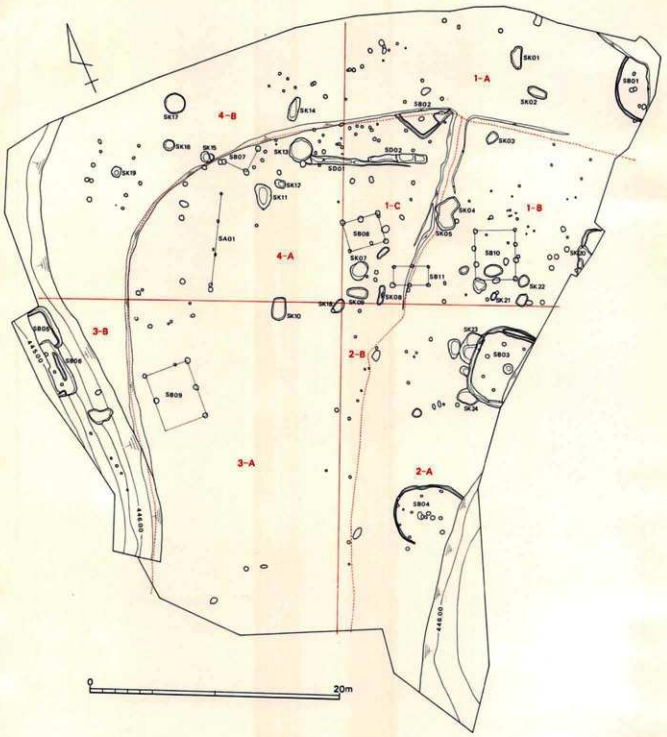
現地説明会風景

これに対して調査区中央から１・４区にかけては黄褐色粘質土の安定した地山となり、削平されているものの遺構の残存状況は比較的良好であった。主な遺構には縄文時代中期後半の円形土坑１基、弥生時代中期後半から後期前半にかけての竪穴住居跡２軒、いわゆる袋状土坑２基、古墳時代後期後半の竪穴住居跡１軒、このほか時期不詳の掘立柱建物跡４棟、土坑24基、溝状遺構２などがある。

縄文時代の土坑（ＳＫ17）内からは撚糸文状の文様を施した土器を主体とする中期後半の土器が出土した。この土坑の性格については特定できないが、貯蔵穴の可能性が考えられ、上下町では初例である。なお、本遺跡からは遺構には伴わないが、このほかに縄文土器、石器が出土しており、縄文時代の遺構の存在の可能性がある。また、弥生時代後期前半に比定される方形住居跡（ＳＢ03）は焼失家屋で、住居跡内から多量の焼土とともに垂木・壁板などの炭化材が屋内に倒壊した状態で検出した。一方、本住居跡よりやや時期がさかのぼるＳＫ13はいわゆる袋状土坑で、断面がやや胴張りのフラスコ状を呈する。土坑内から有機質の遺物などは出土していないが、一応貯蔵穴と考えられよう。古墳時代の住居跡ＳＢ02内からは少量の鉄滓が出土し、鍛冶遺構の可能性も考えられる。




第３図　遺跡周辺地形図（１：2000）（数字は標高　アミ目は調査範囲）



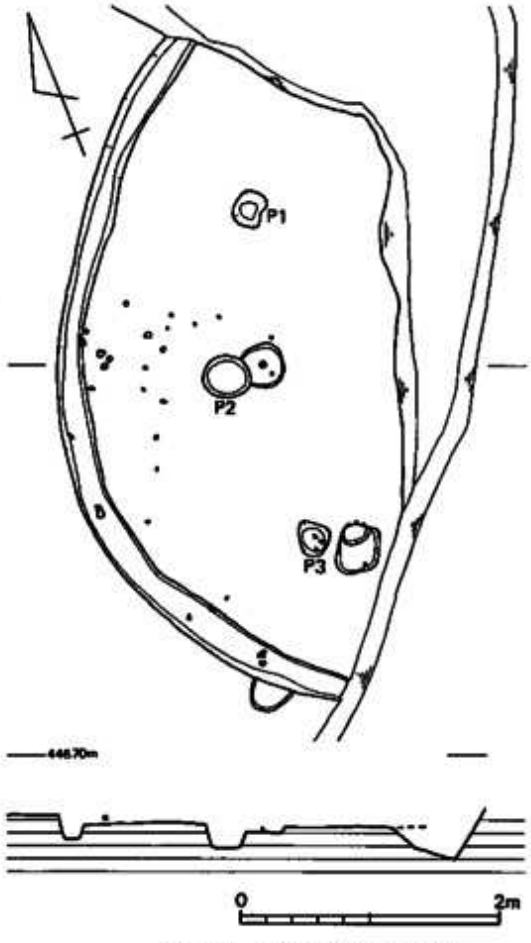

第4図　遺構配置図(1：300)

## (IV) 遺　　構

### (1) 住居跡

**ＳＢ01**　（第５図、図版４）

この住居跡は調査区北東隅（１－Ａ区）、に位置し、本来尾根筋上に立地したと思われる。平面は円形を呈し、北東側1/2以上が耕地開削により欠損するが、規模は径6.0～6.2mと推定される。現存の壁高は２～５cmで、壁際には幅18～28cm、深さ５～12cmの壁溝がめぐる。残存床面はやや凹凸を有するが、貼床などは認められない。住居跡覆土は少量の炭化物を含む暗茶褐色粘質土である。残存床面でピット５本を検出する。このうち主柱穴は３本で、Ｐ１は径28cm、深さ51cm、Ｐ２は径38cm、深さ38cm、Ｐ３は径22cm、深さ10cmである。残存床面積から考えて少なくとも６本以上の主柱穴を有したと考えられる。各柱穴内には黒褐色粘質土が流入していた。また柱穴間はＰ１～Ｐ２が1.3m、Ｐ２～Ｐ３が1.4mである。遺物は残存床面から散在する状況で弥生中期後半の土器が出土した。



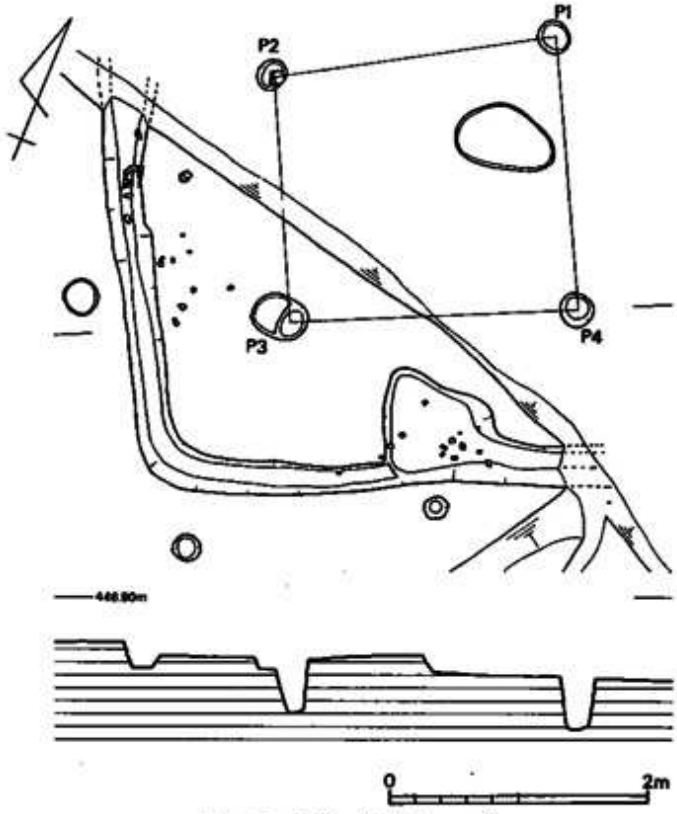
第５図　SB01 実測図（１：60）

**ＳＢ02**　（第６図、図版５）

本住居跡は、調査区１－Ａ区からＣ区にかけて位置する。平面は隅丸方形を呈し、１－Ａ区では主柱穴のみ現存する。１－Ｃ区では南辺3.2m、西辺2.8mの壁が残存するが、Ｐ３と残存壁及び柱穴間の距離から一辺4.8m前後の住居跡であったと推定される。現存の壁高は８～11cmで、壁際には幅20～30cm、深さ７～10cmの壁溝がめぐる。住居跡覆土は黒褐色粘質土である。主柱穴は４本で、このうちＰ３を除く３本は少なくとも16cm前後の削平を受けている。規模はＰ１は径26cm、深さ37cm、Ｐ２は径20cm、深さ32cm、Ｐ３は径30cm、深さ42cm、Ｐ４は径26cm、深さ30cmである。Ｐ２内では底面から16cm遊離して上面平坦な礫が出土しており、他の柱穴に

はこのような礫は認められないが、一応根石と考えられる。柱穴間の距離はＰ１～Ｐ２が2.2m、Ｐ２～Ｐ３が1.94m、Ｐ３～Ｐ４が2.24m、Ｐ４～Ｐ１が2.14mで、ややＰ２が内側に位置する。各柱穴内には黒褐色粘質土が流入していた。また、南壁中央部付近で長軸83cm、短軸72cm、深さ16cmの不整形土坑を検出した。土坑の覆土は黒褐色粘質土で本住居跡覆土と同質であることから住居跡に伴うものと考えられる。

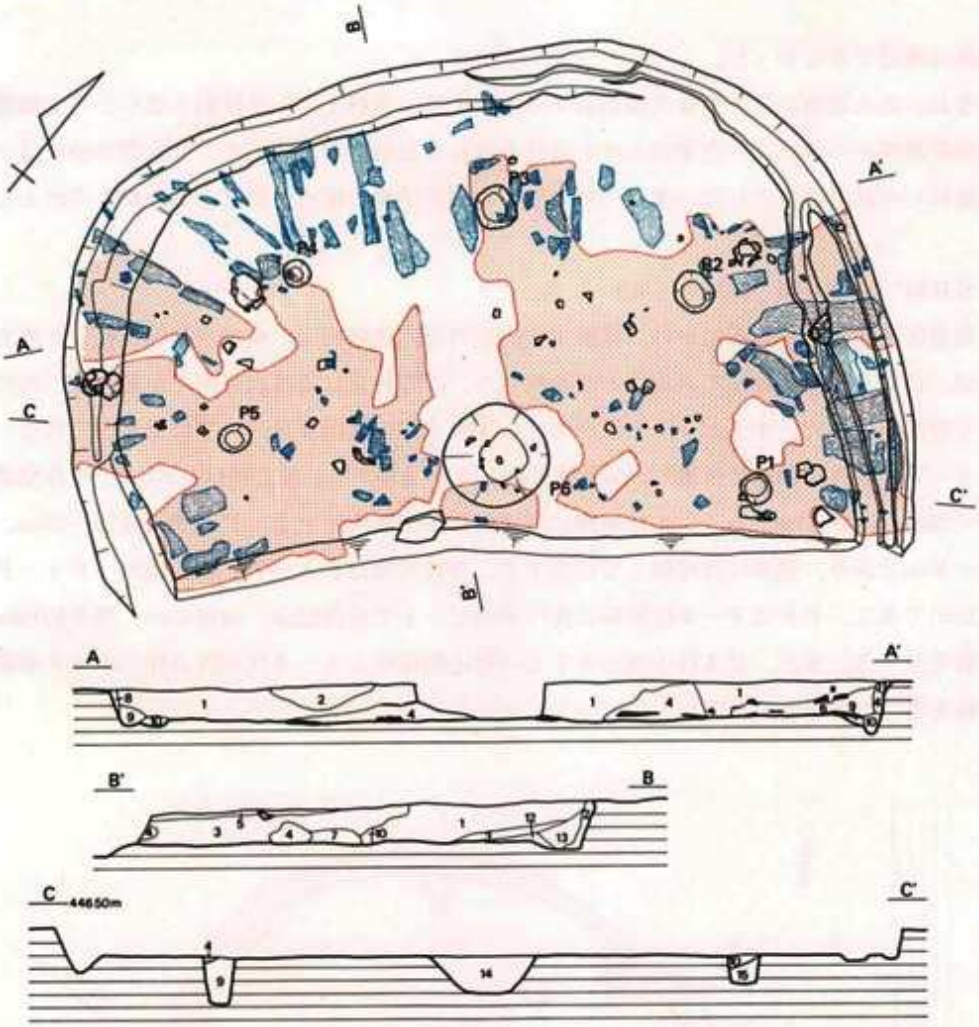
一方、住居跡外面で径18～28cm、深さ５～12cmのピット３本を検出した。これらのピットは住居跡南隅外側のピットを中心にほぼ等間隔に位置するほか、壁からの距離がほぼ近似することから本住居跡に伴う屋根材のうけのためのピットであると考えられる。なお、遺物は西壁溝中から土師器甕形土器、砥石、南壁中央付近の土坑内から須恵器・杯蓋、土師器片が出土し、南壁直下の床面に貼付いた状態で鉄滓が少量出土した。



第６図　SB02 実測図（１：60）

**ＳＢ03　（第７図、図版６、７）**

調査区２－Ａ区東辺に位置する。平面は不整方形を呈し、約1/2が下段耕地のため欠損するが、現存状況から一辺6m前後と推定される。本来尾根線よりやや斜面に下った付近に立地したと思われ、現存の壁高は８～30cmで比較的残りが良く、とくに西側の残りが良好であり、壁際にめぐる壁溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は、北東側を除いては２条の溝が重複してめぐり、改築が行なわれたことがうかがえる。なお壁溝の深さは床面から５～15cm、幅は20cmである。主柱穴は残存床面で５本検出したが、柱の配置からみて８本柱であったと考えられる。規模は、Ｐ１が径24cm、深さ20cm、Ｐ２が径34cm、深さ24cm、Ｐ３が径34cm、深さ18cm、Ｐ４が径21cm、深さ33cm、Ｐ５が径24cm、深さ36cmで、各柱穴間はＰ１～Ｐ２で1.58m、Ｐ２～Ｐ３が1.66m、Ｐ３～Ｐ４が1.62m、Ｐ４～Ｐ５が1.34mであり、壁際から1.16～1.3m離れてほぼ等間隔に配列している。残存床面東辺中央には、径80cm、深さ30cmの断面擂鉢状の中央ピットがある。ピット中には少量の土器片を含んだ黒色粘質土が充満していた。




土層説明

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 淡灰褐色土 | 6 | 淡赤褐色土 | 11 | 明灰褐色土 |
| 2 | 黒褐色土 | 7 | 暗赤褐色粘質土 | 12 | 暗灰褐色土 |
| 3 | 淡黒褐色土 | 8 | 淡褐色土 | 13 | 黒色粘質土 |
| 4 | 焼　土 | 9 | 暗黒褐色粘質土 | 14 | 黒褐色粘質土 |
| 5 | 灰褐色土 | 10 | 淡黒褐色粘質土 | 15 | 青灰褐色土 |

0　2m

第7図　SB03 実測図(1：60)（赤：焼土、青：炭化材）

ところで、本住居跡は焼失家屋で多量の焼土とともに柱材などの炭化材が出土した。焼土は、住居跡中央部を中心に広がり、もっとも厚い部分で約30cmの堆積が認められた。また炭化材は壁際を中心に存在しており、中央部焼土下はほとんど認められなかった。炭化材は、板状のものと棒状のものがあり、板状のものは壁際から内部に倒れ込んだ状況で出土しており、壁板の一部と考えられる。また、棒状のものは垂木または壁板を支える杭と考えられる。事実、壁に密着し垂直に立った状態の棒状の炭化材を検出している。しかし、壁溝底面には支柱を立てた

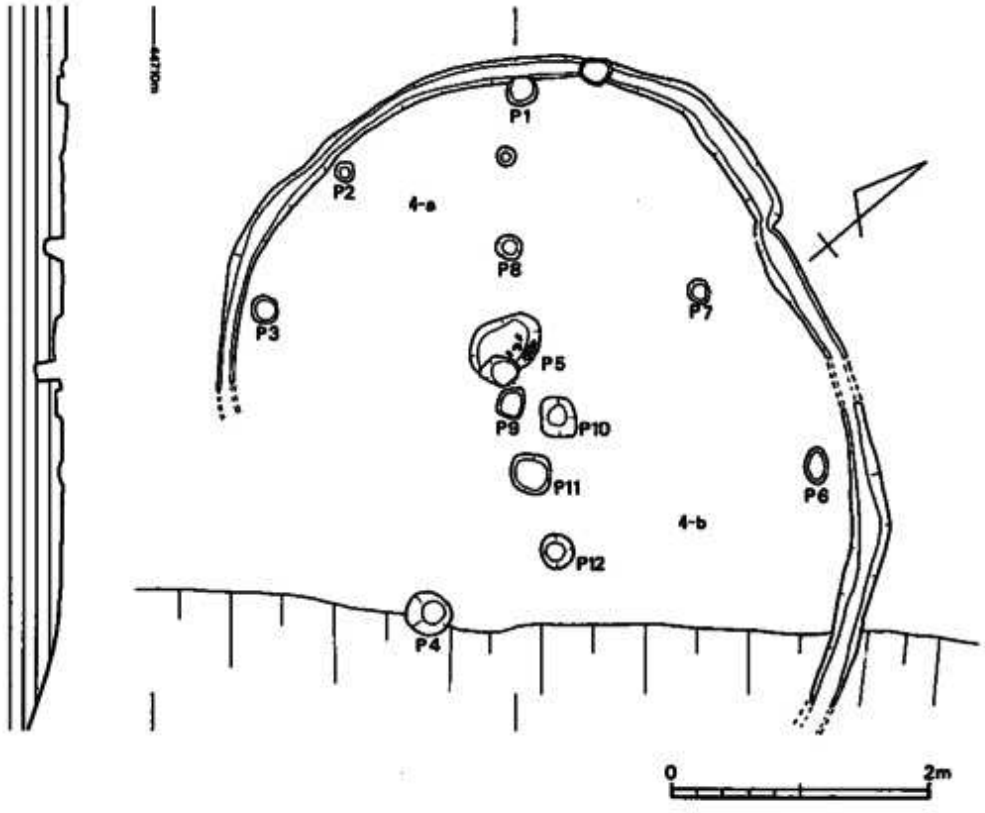
痕跡は確認できなかった。

なお、出土遺物には弥生時代後期前半の壺形土器・甕形土器・高杯形土器などの土器類及び姫島産黒曜石のチップ、作業台と考えられる台石など石器がある。とくに大型の破片は、床面に貼付いた状態で出土した。また、覆土中から縄文早期の楕円押型文土器片が１点出土した。

**ＳＢ04　（第８図　図版８－ａ）**

調査区２－Ａ区、斜面にかけて位置する円形の竪穴住居跡で、検出当初は１軒分と考えていたが、結局２軒が切合っていることが判明した。この付近は遺構面の削平が著しく、両住居跡とも壁溝、主柱穴、中央ピットを残存するにすぎず、前後関係については明らかではない。

４－ａ住居跡は西側に位置し、全壁溝の約1/3が遺存する。推定径は4.5mで、現存壁溝は幅12～26cm、深さ３cmである。本住居跡に確実に伴う主柱穴はＰ１～Ｐ３で、径15～23cm、深さ６～８cmであり、壁溝にほぼ接して位置する。各柱穴間はＰ１～Ｐ２が1.52m、Ｐ２～Ｐ３が1.23mである。Ｐ５は４－ａ住居跡に伴う中央ピットで長径62cm、短径43cm、深さ約10cmの楕円形を呈する。また、Ｐ４は中央ピットとの対応関係から４－ａ住居跡に伴い本来８本前後の主柱を有したと考えられる。




第８図　SB04 実測図（１：60）

出土遺物は、Ｐ５中央ピット覆土中から弥生土器片が出土したが、小片であるため時期は不明である。

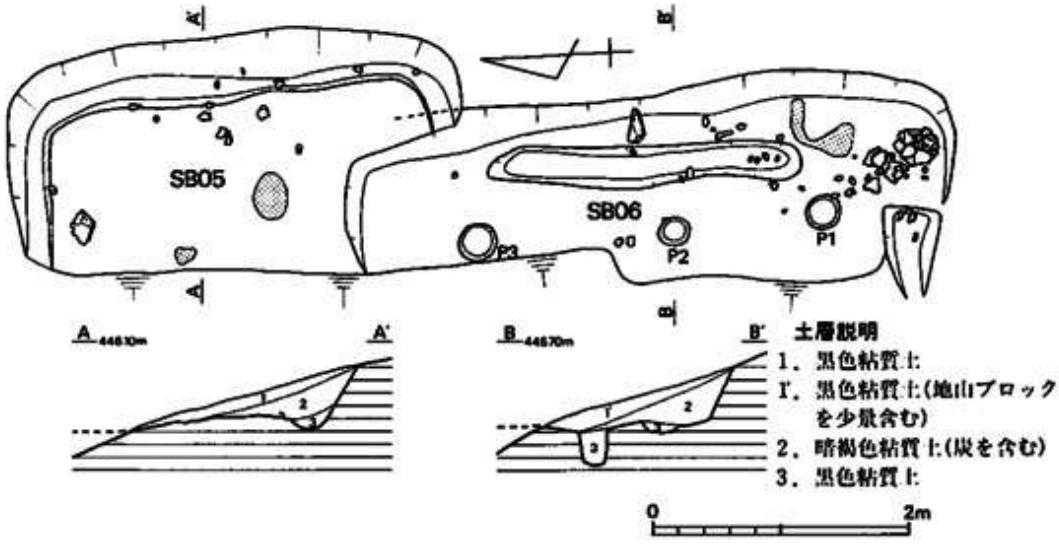
一方、４－ｂ住居跡は４－ａ住居跡の東側に位置し、全壁溝の約1/4が遺存する。住居跡推定径は5.3m前後で、現存壁溝は幅24～30cm、深さ６～８cmである。主柱穴はＰ６～Ｐ８で径14～24cm、深さ10～15cmである。各柱穴は中央ピットと考えられるＰ11から1.76～2.20mの距離にあり、壁溝よりやや内側に位置する。柱穴間はＰ６～Ｐ７が1.6m、Ｐ７～Ｐ８が1.50mである。中央ピットＰ11は径約32cm、深さ10cmである。このＰ11を挟んでほぼ直線上の等距離にＰ９、Ｐ12が位置することから、これら柱穴も主柱穴と考えられ、本住居跡は中心に２本、周辺部に８本前後の主柱を有したと考えられる。

遺物は、Ｐ７から弥生土器片が１点出土したが、時期は不明である。

**ＳＢ05**　（第９図　図版８－ｂ、９－ａ）

調査区３－Ｂ区、斜面に位置する隅丸方形住居跡で、西斜面側は流失し、南壁はＳＢ06によって切られている。東壁の長さは3.4mであり、壁の直下には幅10～26cm、深さ５～８cmの壁溝がめぐり、壁は壁溝底面から約60度の角度で立ち上がる。本遺構は、角礫を含む地山に掘込まれているため壁及び床面は凹凸が著しいが、床面には貼床状のものは確認できなかった。また、主柱穴は残存床面では検出できなかった。なお、残存床面のほぼ中央と西端部の２箇所で焼土を検出したが、範囲は狭く、量もごくわずかであった。

遺物は、床面から弥生時代中期後半の甕形土器・高杯形土器・鉢形土器があるほか、覆土中から古式土師器の壺形土器が出土した。




第９図　SB05・06 実測図(１：60)（アミ目：焼土）

**ＳＢ06**　（第９図、図版８－ｂ、９）

ＳＢ05の南側に位置し、ＳＢ05を切って造られた隅丸方形の竪穴住居跡で西斜面側は流失している。東辺の長さは推定4.6mであり、壁は床面から約65度の角度で立ち上がる。床面はＳＢ05同様角礫を含む地山を掘り込んでいるため凹凸が著しくやや西に傾斜するが、貼床は確認できなかった。主柱穴は壁際より60～80cm離れて３本検出した。径は24～29cm、深さ４～26cmで中央のＰ２がもっとも深い。また、床面の南東部で焼土の広がりを確認したが範囲は狭い。

なお、壁際から10～36cm離れ長さ2.46m、幅26～33cm、深さ５～８cmの浅い溝状遺構を検出しており、壁面とほぼ平行することから本遺構に伴う壁溝あるいは住居跡拡張以前の住居跡の壁溝の可能性が考えられる。

遺物は、６世紀後半の土師器の甕形土器１個体分が住居跡南東隅から出土したほか、床面に散在した状況で土師器が出土した。

**ＳＢ07**　（第10図、図版10－ａ）

調査区４－Ａ区に位置する掘立柱建物跡で４－Ｂ区にかけ広がっていたと考えられるが、削平のため欠損し、現状では３本の柱穴が遺存するにすぎない。柱穴の規模は径40～46cm、深さ20～25cmで、各柱穴間はＰ１～Ｐ２間で2.14m、Ｐ２～Ｐ３間で2.0mである。遺物は、各柱穴から弥生土器小片が出土したが、時期は不明である。

**ＳＢ08**　（第10図、図版10－ｂ）

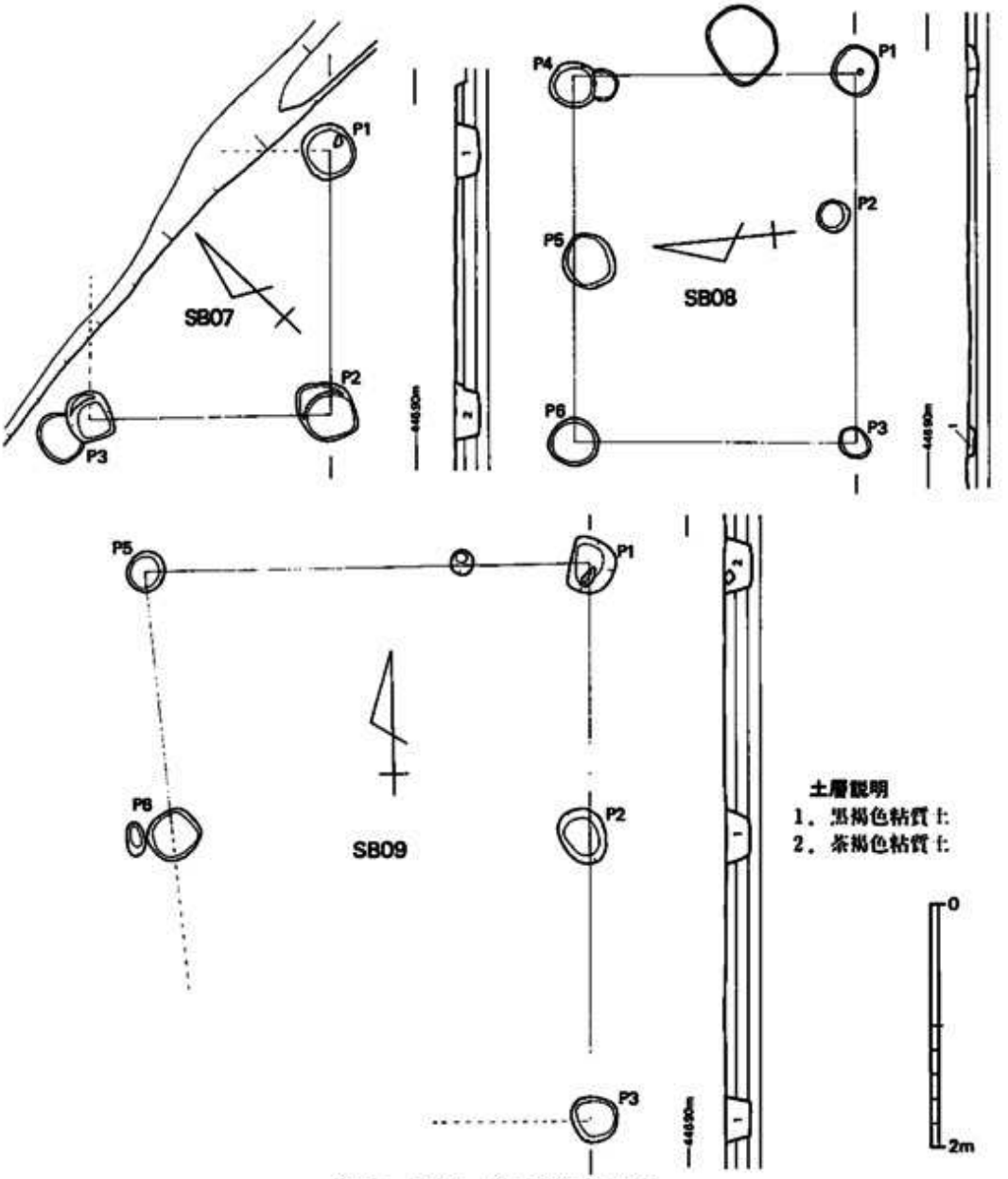
調査区１－Ｃ区に位置する１間×２間の掘立柱建物跡で、桁行2.9m、梁行2.3mで棟方向はN85°Wである。柱穴は６本で、規模は径27～43cm、深さ５～21cmとかなりのばらつきが認められる。このうちＰ２はやや内側に位置するうえ、桁方向の中心線よりややずれている。各柱穴土層断面観察の結果では柱痕は認められず、黒褐色ないし茶褐色粘質土を主とする覆土が充満していた。Ｐ４覆土中からは弥生土器小片、Ｐ５覆土中からは黒曜石チップ、弥生土器と思われる破片が出土したが時期は不明である。

**ＳＢ09**　（第10図、図版11－ａ）

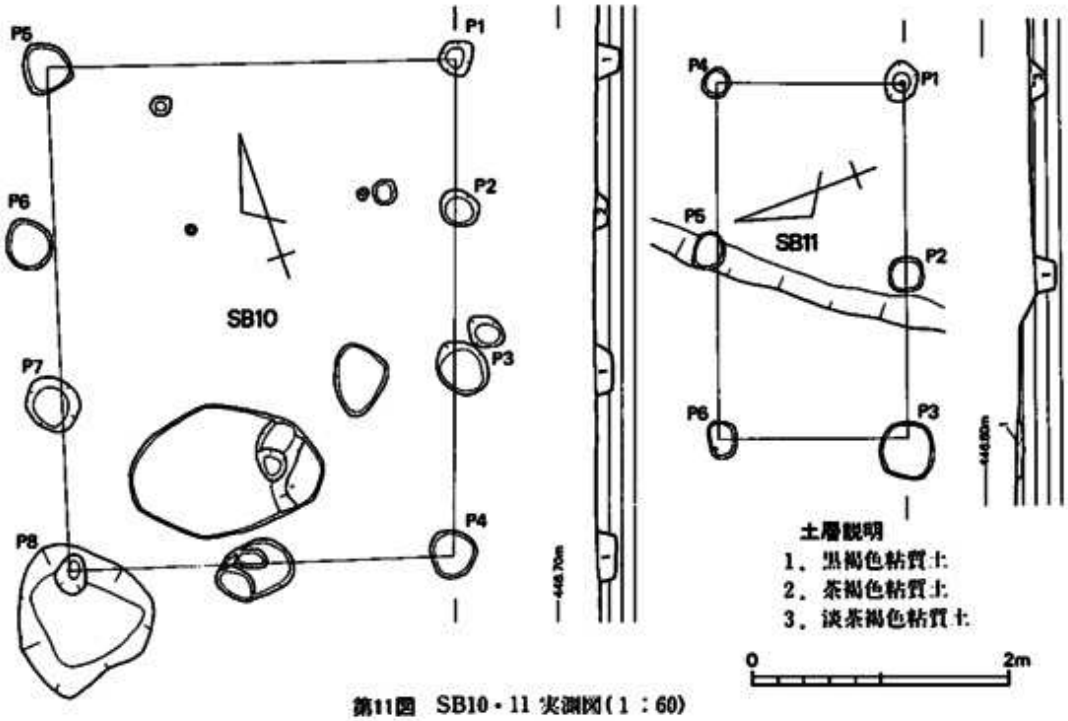
調査区３－Ａ区に位置する１間×２間（？）の建物跡で、桁行4.6m、梁行3.65mであり、棟方向はＮ２°Ｅでほぼ磁北方向に主軸をとる。柱穴は５本で、南西隅の柱穴は確認できなかったが、遺構面が著しく削平を受けているため欠損した可能性が考えられる。柱穴の規模は径33～47cm、深さ８～21cmである。Ｐ１の覆土中から縦長の角礫１点が斜めになった状態で出土したが、底面から遊離しており根石とは考え難い。なお、柱痕跡は認められず、黒褐色ないし茶褐色粘質土が充満していた。遺物は、Ｐ１から弥生土器と思われる小片が少量出土したにすぎない。

**ＳＢ10　（第11図、図版11－ｂ）**

調査区１－Ｂ区に位置する１間×３間の建物跡で、桁行3.85m、梁行3.18mで、棟方向はN 19°Eである。柱穴は８本で、径25～45cm、深さ７～18cmで、底面レベルはほぼ同一である。各柱穴はほぼ対応する位置にあり、各柱穴間は桁方向で1.15～1.45mであるがＰ６についてはやや西側にずれて位置する。柱痕等は認められず、各柱穴覆土は茶褐色ないし黒褐色粘質土で充満していた。なお、出土遺物は皆無であった。




第10図　SB07～09 実測図（1：60）




第11図　SB10・11 実測図（1：60）

**ＳＢ11　（第10図）**

１－Ｂ及びＣ区にかけて検出した１間×２間の小規模な建物跡で、桁行2.7m、梁行1.5mであり、棟方向はN70°Wである。柱穴は６本で、径23～42cm、深さ７～15cmの小規模なものが多い。各柱穴間は桁方向で1.25～1.5mでほぼ対応する位置にある。柱痕は認められず、各柱穴には黒褐色粘質土または淡茶褐色粘質土が充満していた。遺物は、Ｐ６から弥生土器と思われる小片が出土したが時期は不明である。

## (2)　土坑

調査区全域から検出した土坑は、大別して円形を呈するものと長方形を呈するものとに分類できるが、両者間に分布上の差違はほとんど認められず、わずかに調査区４－Ｂ区にかけて円形の土坑が集中する傾向を示すにすぎない。また、長方形の土坑は遺構面が削平を受けていることを考慮しても概して浅いものが多いが、円形の土坑はやや深い傾向を示している。一方両者に共通する点として概ね素掘りの土坑が多いことがあげられるが、例外的に円形土坑中にいわゆる袋状土坑が２基存在する。

**ＳＫ04・05　（第12図、図版13－ａ）**

調査区１－Ｂ区で検出した２基の長方形土坑で、新旧関係は05が古く04が新しい。両者の主軸方向はほぼ直角となっているがともに深さ11～13cm底面はほぼ平坦である。遺物は、ＳＫ04

から弥生土器（後期？）が出土した。

ＳＫ07　（第13図　図版13－ｂ、14－ａ）

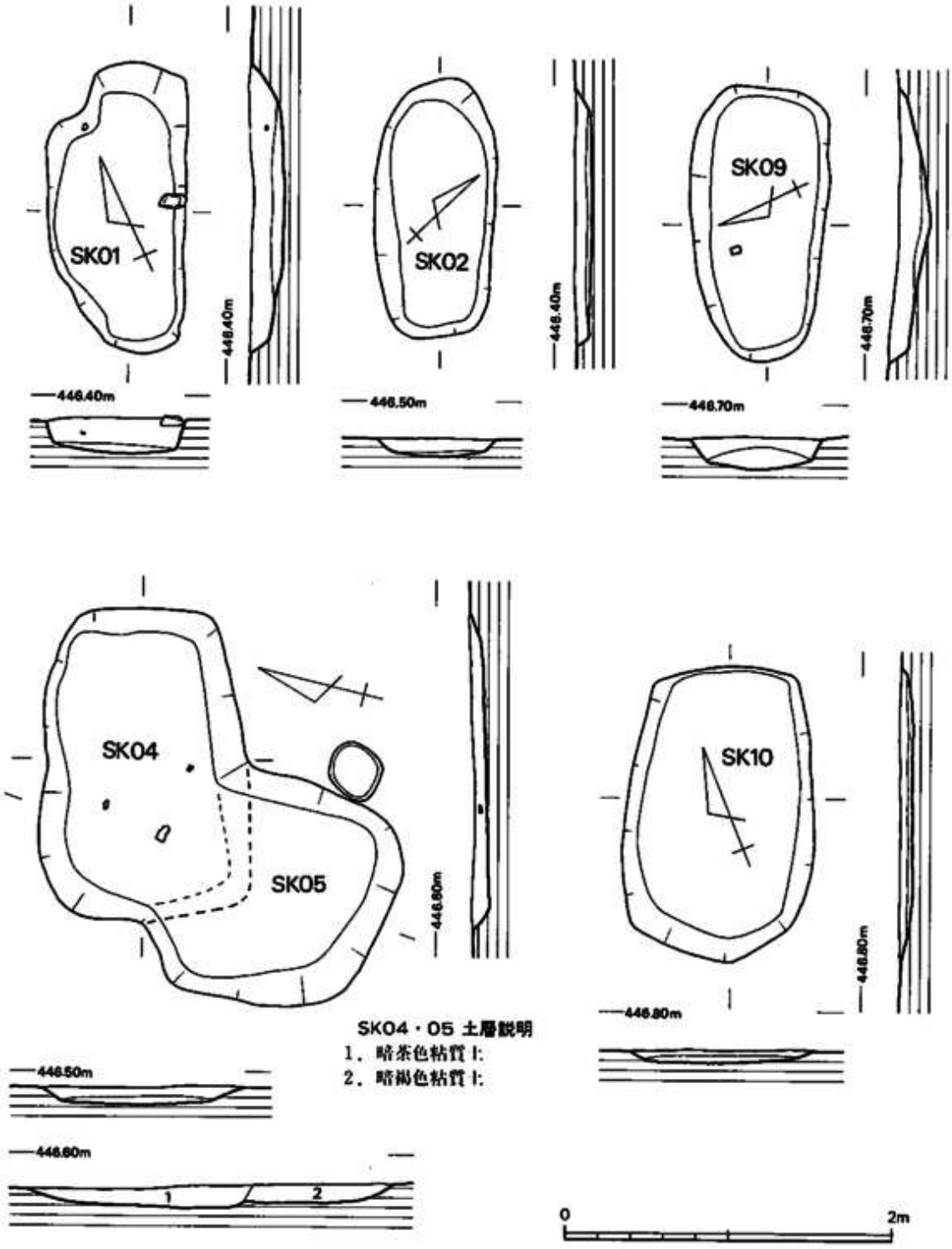
１－Ｃ区検出の不整円形を呈する土坑で、断面がやや膨張りするいわゆる袋状土坑である。現存の深さは25cmで、底面はやや北側に傾斜する。覆土は黒褐色粘質土を主体に地山崩落土の黄褐色粘質土などがある。遺物は、底面から弥生時代中期後半の甕形土器などが出土した。

ＳＫ10

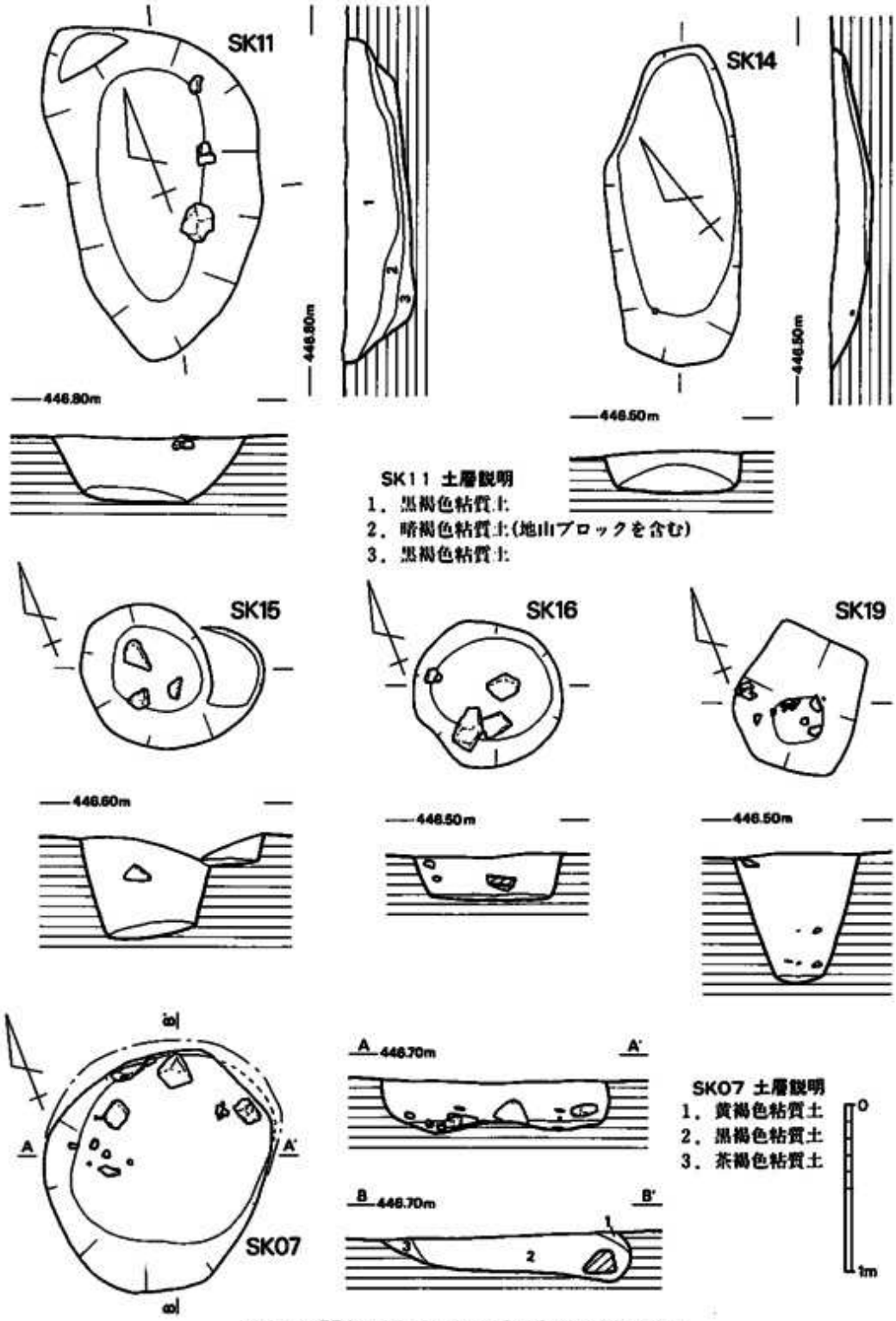
３・４－Ａ区にかけて検出した長方形の土坑で、現存の深さは７cmで底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

表２　土坑計測一覧表

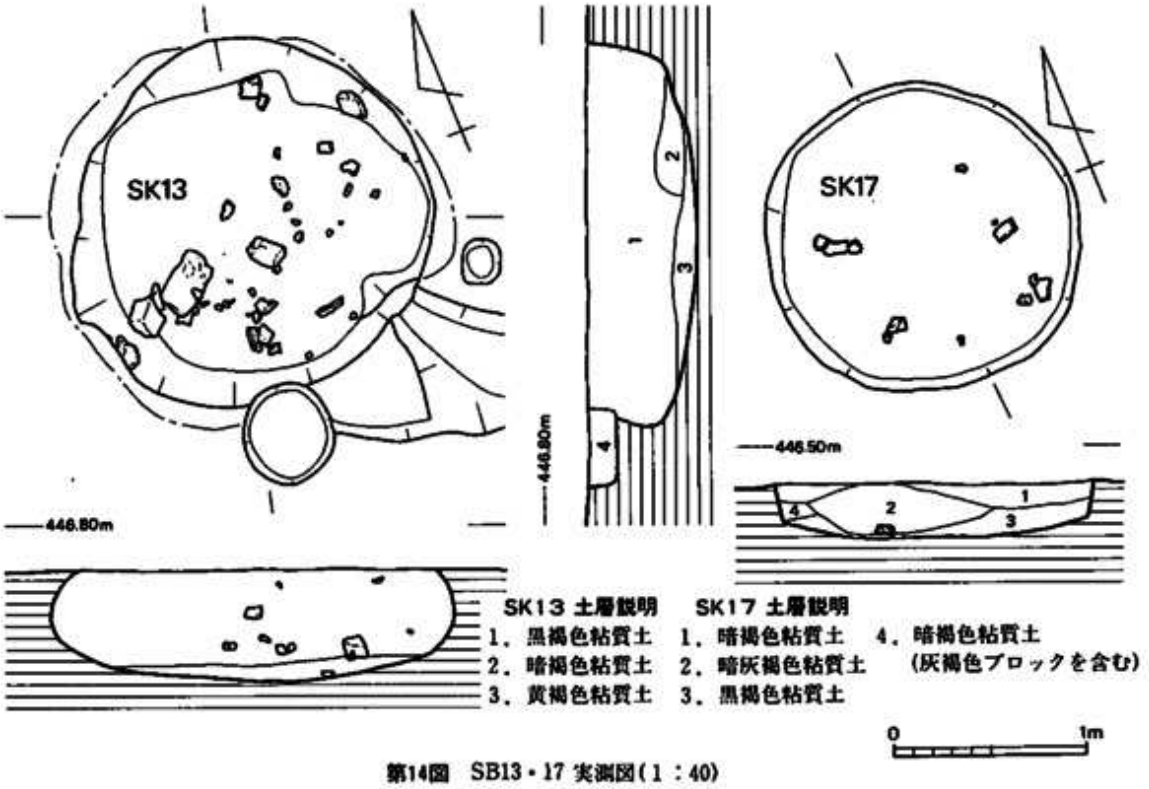
| 土坑番号 | 土坑上縁 長さ cm | 土坑上縁 幅 cm | 土坑上縁 深さ cm | 土坑底 長さ cm | 土坑底 幅 cm | 主軸の方位 | 形状 | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 180 | 84 | 21 | 130 | 74 | N20°E | 長方形 | | |
| 2 | 160 | 73 | 10 | 140 | 56 | N47°W | 長方形 | | |
| 3 | 114 | 74 | 12 | 106 | 68 | N53°W | 長方形 | 弥生土器 | |
| 4 | 191 | 124 | 11 | 162 | 89 | N75°E | 長方形 | 弥生土器 | 5を切ってつくる |
| 5 | 140 | 130 | 13 | 110 | 106 | N87°E | 長方形 | | |
| 6 | 126 | 50 | 7 | 120 | 48 | N69°E | 長方形 | | |
| 7 | 150 | 130 | 25 | 125 | 128 | N38°E | 不整円形 | 弥生土器 | やや袋状をなす |
| 8 | 156 | 51 | 11 | 143 | 46 | N32°E | 長方形 | | |
| 9 | 168 | 82 | 24 | 154 | 64 | N62°W | 長方形 | 弥生土器 | |
| 10 | 178 | 116 | 7 | 158 | 97 | N28°E | 長方形 | | |
| 11 | 200 | 116 | 28 | 140 | 62 | N19°E | 不整長方形 | 縄文土器・弥生土器 | |
| 12 | 92 | 64 | 16 | 42 | 42 | N51°W | 不整形 | | |
| 13 | 196 | 190 | 57 | 158 | 160 | —— | 円形 | 弥生土器 | 袋状土坑　最大値 205×210cm |
| 14 | 192 | 81 | 24 | 156 | 68 | N36°E | 不整長方形 | | |
| 15 | 94 | 78 | 62 | 74 | 52 | N47°W | 円形 | 縄文土器 | ピットを切っている |
| 16 | 92 | 90 | 28 | 60 | 71 | —— | 円形 | | |
| 17 | 164 | 160 | 28 | 150 | 154 | —— | 円形 | 縄文土器 | |
| 18 | 120 | 76 | 14 | 110 | 70 | N51°E | 不整長方形 | 縄文土器 | 小ピットによって切られる |
| 19 | 80 | 74 | 78 | 36 | 30 | N52°E | 不整円形 | 弥生土器 | |
| 20 | 544 | 270 | 14 | 496 | 244 | —— | 不整形 | 弥生土器・土師器 | |
| 21 | 66 | 42 | 4 | 62 | 37 | N48°E | 長方形 | 土師器 | |
| 22 | 100 | 82 | 10 | 90 | 70 | N61°E | 楕円形 | 弥生土器？ | |
| 23 | 190 | 130 | 10 | 170 | 90 | N46°E | 長方形 | 縄文土器？,弥生土器 | SB03によって切られる |
| 24 | 254 | 90 | 21 | 210 | 70 | N73°W | 不整円形 | 弥生土器 | SB03によって切られる |




第12図　SB01・02・04・05・09・10 実測図(1：40)




第13図　SB07・11・14・15・16・19 実測図(1：40)




第14図　SB13・17 実測図（1：40）

**ＳＫ11　（第13図、図版15－ａ）**

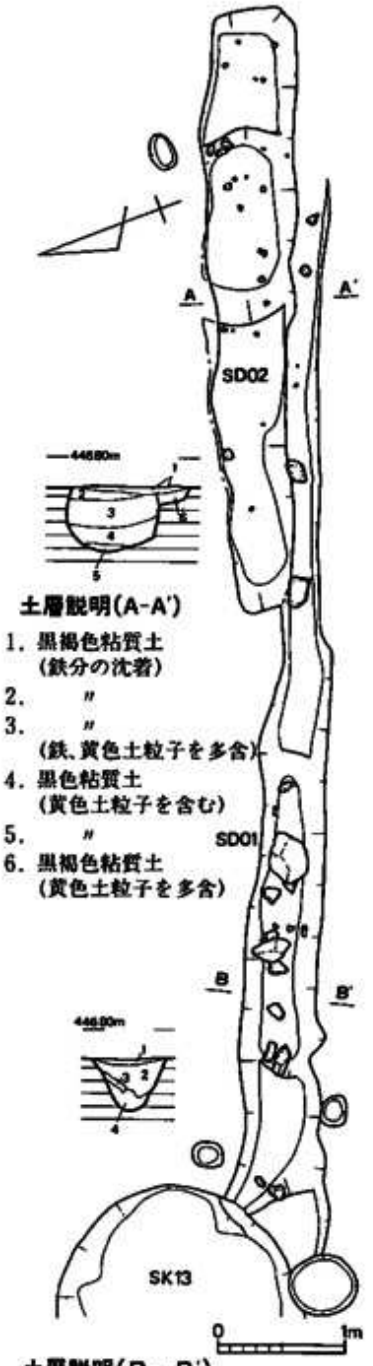
４－Ａ区にある不整長方形を呈する土坑で、北隅に小さな半月形のテラス面がある。現存の深さは28～40cmであり、断面逆台形を呈し、底面は南側に傾斜する。覆土は黒褐色粘質土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土である。遺物は、覆土中から縄文中期後半の撚糸文状の文様を施した土器、弥生土器片、安山岩の剥片などが出土した。

**ＳＫ13　（第14図、図版16）**

４－Ａ区、ＳＫ11の北東4.5mにある円形土坑で、ＳＤ01を切って掘り込んでいる。本土坑もＳＫ07同様いわゆる袋状土坑で、最大径は底面より40cm上方にある。底面は緩やかにカーブしており、断面はやや胴張りした逆台形を呈する。覆土は最下層に黄褐色粘質土があり、この上層に黒褐色粘質土が堆積している。遺物は、黄褐色粘質土上面に密着して弥生時代中期後半の甕形土器などが出土した。

**ＳＫ14　（第13図）**

ＳＫ13の北側1.4mにある不整長方形の土坑である。現存の深さは８～20cmであり、底面は中央部にかけ両小口から傾斜する。覆土は黒褐色粘質土の単層で、遺物は小礫１点である。




土層説明(A-A')

1. 黒褐色粘質土
(鉄分の沈着)
2. 〃
3. 〃
(鉄、黄色土粒子を多含)
4. 黒色粘質土
(黄色土粒子を含む)
5. 〃
6. 黒褐色粘質土
(黄色土粒子を多含)

土層説明(B－B')

1. 黒褐色粘質土(鉄分の沈着)
2. 〃
3. 〃 (黄色土粒子を含む)
4. 暗褐色粘質土(黄色土粒子を含む)

第15図 SD01・02実測図(1:60)

**ＳＫ15 (第13図)**

４－Ｂ区にある小型の円形土坑で、現存の深さは62cmである。底面はほぼ平坦で断面逆台形を呈する。覆土は淡茶褐色粘質土で、覆土中からは縄文中期頃の撚糸文土器２点が出土したほか、拳大よりやや大きな角礫が出土した。

**ＳＫ17 (第14図、図版17－ｂ)**

４－Ｂ区、ＳＫ15の北側3.4mにある。径約1.6mのほぼ整円形を呈する土坑で、現存の深さは28cmである。底面は平坦で壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色ないし黒褐色粘質土で、覆土中から縄文中期後半の撚糸文状の文様を施した土器が比較的まとまって出土したほか、拳大の角礫が出土した。

**ＳＫ18 (図版14－ｂ)**

ＳＫ07の南西約２mにある不整長方形を呈する土坑で、現存の深さは14cmである。底面は中央にかけ凹み灰褐色粘質土が充満していた。覆土中から縄文中期後半の撚糸文状の文様を施した土器１点が出土した。

## (3) その他の遺構

**ＳＤ01・02 (第15図、図版18)**

１－Ｃ区から４－Ａ区にかけ検出した２本の溝状遺構で、新旧関係は01が古く02が新しい。また、ＳＤ01はＳＫ13によって切られている。ＳＤ01は現存の長さ8.30m、幅30～80cmで、断面Ｕ字形を呈する。底面は中央部で長さ2.5mにわたって一段下っている。覆土は黒褐色粘質土で、覆土中から縄文・撚糸文状の文様を施した土器、弥生前期の甕形土器が出土したほか、火を受けた角礫が出土した。一方ＳＤ02は長さ4.7m、幅42～70cm、深さ33～54cmであり、中央部分が長さ1.4mにわたって一段下っている。壁は部分的にオーバー・ハングする部分があるが、断面はほぼＵ字形を呈する。覆土は黒褐色粘質土が主に堆積し、覆土中から縄文土器、弥生土器などが出土した。

## (V) 遺　　物

**SB01**

弥生土器（第16図１～３、図版20の１～３）１の甕は頸部から強く外反し、端部は上下方向に拡張し、端面に浅い２条の凹線がめぐる。頸部には、粘土を貼付けヘラ状工具による刺突を施し、口頸部の内外面は横ナデする。２は鉢で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、体部から緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部の内外面は横ナデで、体部外面は縦位のやや粗い刷毛、内面は横位にヘラ削りする。３の底部は平底で復元底径は6.4cmで、体部は緩やかに立ち上る。外面は縦位のヘラ磨き、内面はナデである。

**SB02**

須恵器（第16図４・５、図版20の４・５）４・５とも杯蓋で、４は体部から垂下した口縁部が端部でやや尖り気味となる。５の口縁部は内面がやや肥厚して丸くなる。口縁部内外面ともロクロナデ、天井部はヘラ削りである。

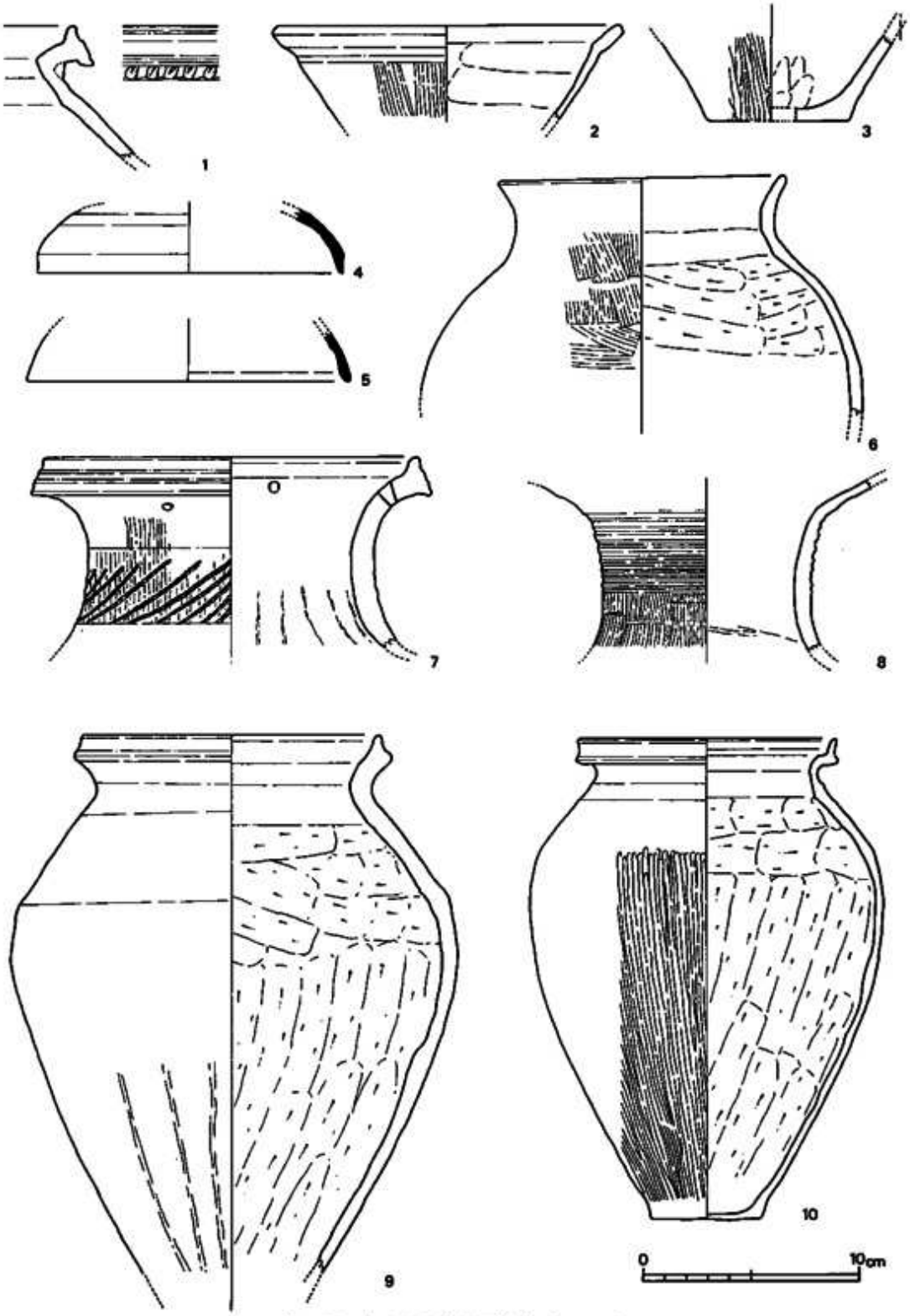
土師器（第16図６　図版20の６）甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。体部は丸みをもち最大径は中位にある。口縁部の内外面は横ナデ。体部外面は頸部から体部上半縦位のやや粗い刷毛、中位は横位の刷毛調整。内面は横位のヘラ削りを行い、色調は淡赤褐色を呈する。

石器（第20図の49、図版23の49）砥石で、途中から欠損しているがよく使用されており、断面は正方形を呈している。現存長８cm、最大幅4.5cm、最大厚3.3cm、重さ186.8gである。石材は不明である。

**SB03**

弥生土器（第16図７～10、第17図11～20、図版20の７・９・10、図版21の８・11～20）７・８は壺である。７の口縁部は頸部から緩やかに外反し端部を上下方向に拡張し、外表面には浅い２条の凹線がめぐる。口縁部には２孔一対の焼成前の円孔が内側からあけられており、頸部には櫛歯状工具による刺突文がめぐる。口縁部内外面横ナデし、頸部外面縦位の粗い刷毛、内面ナデつける。８の頸部は、直線的に外上方にのび口縁部にかけ屈曲してのびる。頸部外面上半に９条の凹線がめぐる。調整は、頸部外面縦位の細かい刷毛、内面縦位のヘラ状工具によるナデつけである。

９～16は甕である。９・14は、口縁部が頸部から緩やかに外反して、上方に拡張する。10・13は、口縁部が頸部から強く屈曲し端部を上方に拡張する。11は、口縁部が頸部からく字形に外反し、端部を上方に拡張する。15は、口縁部が頸部から強く屈曲し、端部を上下方に拡張している。９は最大径が体部上半にあり、やや肩が張り体部下半は直線的に底部へ続く。調整は口頸部の内外面とも横ナデ、体部外面上半は横位のヘラナデ、下半は縦位のヘラナデである。




第16図　出土土器実測図(Ⅰ)（1：3）
（1～3：SB01、4～6：SB02、7～10：SB03）

体部内面の上半は横位のヘラ削り、下半は縦位のヘラ削りである。復元口径は13.6cm、現高24.8cmである。10は口縁部端面がやや凹み端部を丸くおさめる。体部の最大径は上半部にあり、下半にかけて緩やかにカーブして平底の底部へ続く。調整は、口頸部の内外面は横ナデである。体部外面の上半は斜位の粗い刷毛調整後横ナデ、下半は細かな縦位のヘラ磨きである。体部内面の上半は横位のヘラ削り、下半は縦位のヘラ削りで、器壁は極めて薄く仕上げている。復元口径は11.8cm、器高22.8cmである。色調は淡赤褐色を呈する。11の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部外表面に3条の凹線がめぐる。体部最大径はやや上半部にあり、この上方にヘラ状工具による刺突文がめぐる。調整は口頸部の内外面は横ナデである。体部外面の上半は横ナデ、下半は単位の細かい縦位の刷毛。内面上半は横位のヘラ削り、下半は縦位のヘラ削り。口縁部及び体部中位に炭化物が付着する。復元口径は14.9cm、現高24.2cmである。13の口縁部外面はやや凹み、端部は丸くおさめ、口頸部の内外面は横ナデする。15の口端部外面には3条の凹線がめぐる。頸部には粘土帯を貼付けて刺突を施している。口頸部の内外面は横ナデする。12・16は底部で、12は平底の底部から緩やかにカーブして体部へ続く。体部外面は縦位のヘラ磨きで、内面斜位のヘラ削りである。16はやや凹み底を呈し、底部と体部の境に指頭圧痕を残している。

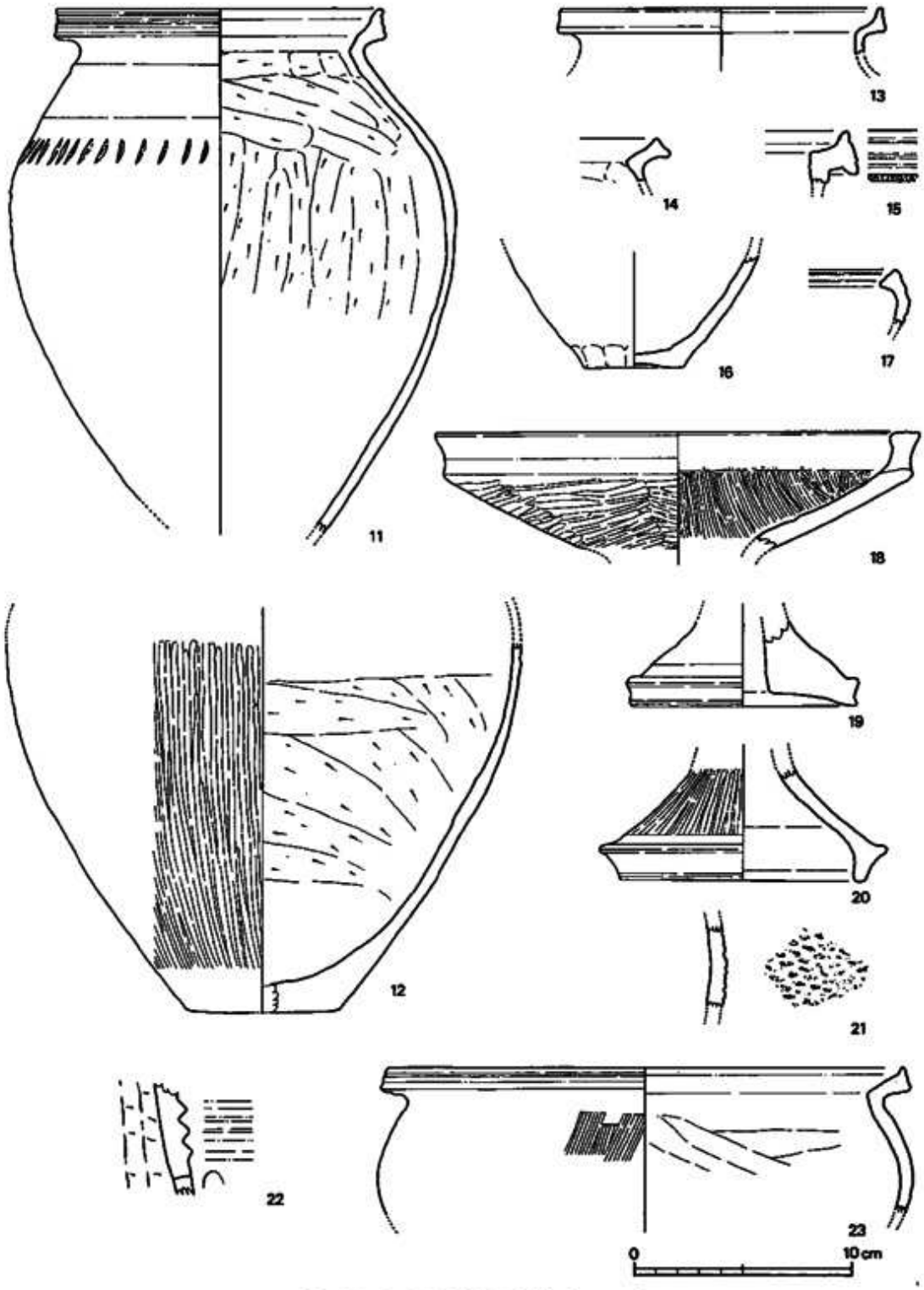
17～20は高杯である。17の口縁部は緩やかに内湾し、端部は平坦で内傾し、2条の浅い凹線、口縁部外面に4条の凹線がめぐる。口縁部の内外面は横ナデする。18の口縁部は直線的に外上方に開く杯部から直立気味に立ち上がり、端部の内外面は拡張する。端面は平坦で3条の浅い凹線がめぐる。調整は、口縁部の内外面に横ナデ、杯部の外面は多角形状のヘラ磨き、内面は斜位のヘラ磨きで、復元口径は22.0cmである。19～20は脚裾部で、19は脚柱部から強くラッパ状に外方へ開き、器壁は肥厚する。端部はやや内傾し上方にわずかに拡張し、端面はわずかに凹む。調整は脚端の内外面は横ナデ、裾部は内面はナデによる。20は脚柱部からラッパ状に開き、端部は内傾し上下方向に拡張する。調整は、端部内外面横ナデ、裾部の内外面磨滅が著しく不明である。

縄文土器（第17図21、図版21の21）楕円押型文土器で6～8㎜前後の楕円文を密に配している。器壁は5㎜と薄く、外面は淡黄褐色、内面は淡赤褐色を呈する。

石器（第20図50、図版23の50）剥片である。石材は、乳白色を呈する黒曜石である。最大長1.5cm，最大幅1.8cm、最大厚1cm、重さ3.0gである。

**SB05**

弥生土器（第17図22・23、第18図24、図版21の22・23、図版22の24）22は高杯の脚柱部で、外面には凸帯文がめぐり焼成前の円孔の一部が残存する。調整は、外面横ナデ、内面ヘラ削り。23は浅鉢で口縁部はく字形に屈曲して外上方にのび、端部は上方に拡張する。口縁部外面に浅い2条の擬凹線がめぐる。体部は丸くカーブする。調整は、口縁部の内外面は横ナデ、体部の外面は縦位の刷毛、内面はヘラ状工具によるナデ。24は甕で、口縁部は頸部からく字形に強く




第17図　出土土器実測図(II)（1：3）
(11～21：SB03、22・23：SB05)

屈曲し、端部は上下方に拡張し、外面には浅い２条の擬凹線がめぐる。体部は緩やかにカーブして下方へ続く。調整は、口頸部の内外面は横ナデである。体部外面の上部は単位の細かい刷毛、肩部から下方は縦位のヘラ磨きである。内面は口頸部直下には指頭圧痕を残し、これより下方は横位のヘラ磨きである。

土師器（第18図25、図版22の25）壺で、口縁部は複合口縁となる。口縁部はほぼ直線的に外上方にのび、端部はわずかに外反し丸くしあげている。口縁外面には櫛歯状工具による波状文が４段にめぐり、下端部に円形浮文を貼付ける。口端部の内外面は横ナデ、口縁部の内面は縦位のヘラ磨きである。

ＳＢ06

土師器（第18図26、図版22の26）甕で、口縁部は頸部から緩やかに外反し端部は丸くおさめる。体部最大径は中位より下半にあり、やや下膨れとなる。底部は丸底を呈する。調整は口端部の内外面及び口頸部の外面は横ナデ、口頸部の内面は横位の刷毛調整後ナデ。体部の外面はやや粗い縦位の刷毛、内面の上半は横位、下半は縦位のヘラ削りである。

ＳＫ07

弥生土器（第18図27～29、図版22の27～29）27は高杯で、口縁部は緩やかに内湾する杯部から強く内傾して短くのび、端部は矩形を呈する。端面は内傾し浅い１条の凹線がめぐり、外面には２条の浅い凹線がめぐる。口縁部の内外面及び杯部の内面は横ナデし、杯部の外面は細かい斜位のヘラ磨き。28は甕で、口縁部は強く外反し、端部は上下方に拡張している。外面には３条の凹線がめぐる。頸部の外面には粘土帯を貼付け、ヘラ状工具による押圧を施す。調整は口頸部の内外面は横ナデである。29は甕の体部で、２本の刻目凸帯がめぐる。調整は外面の凸帯付近は横ナデ、下方は単位の細かい縦位の刷毛。内面はナデ後に単位の細かい横位の刷毛調整をしている。

ＳＫ10

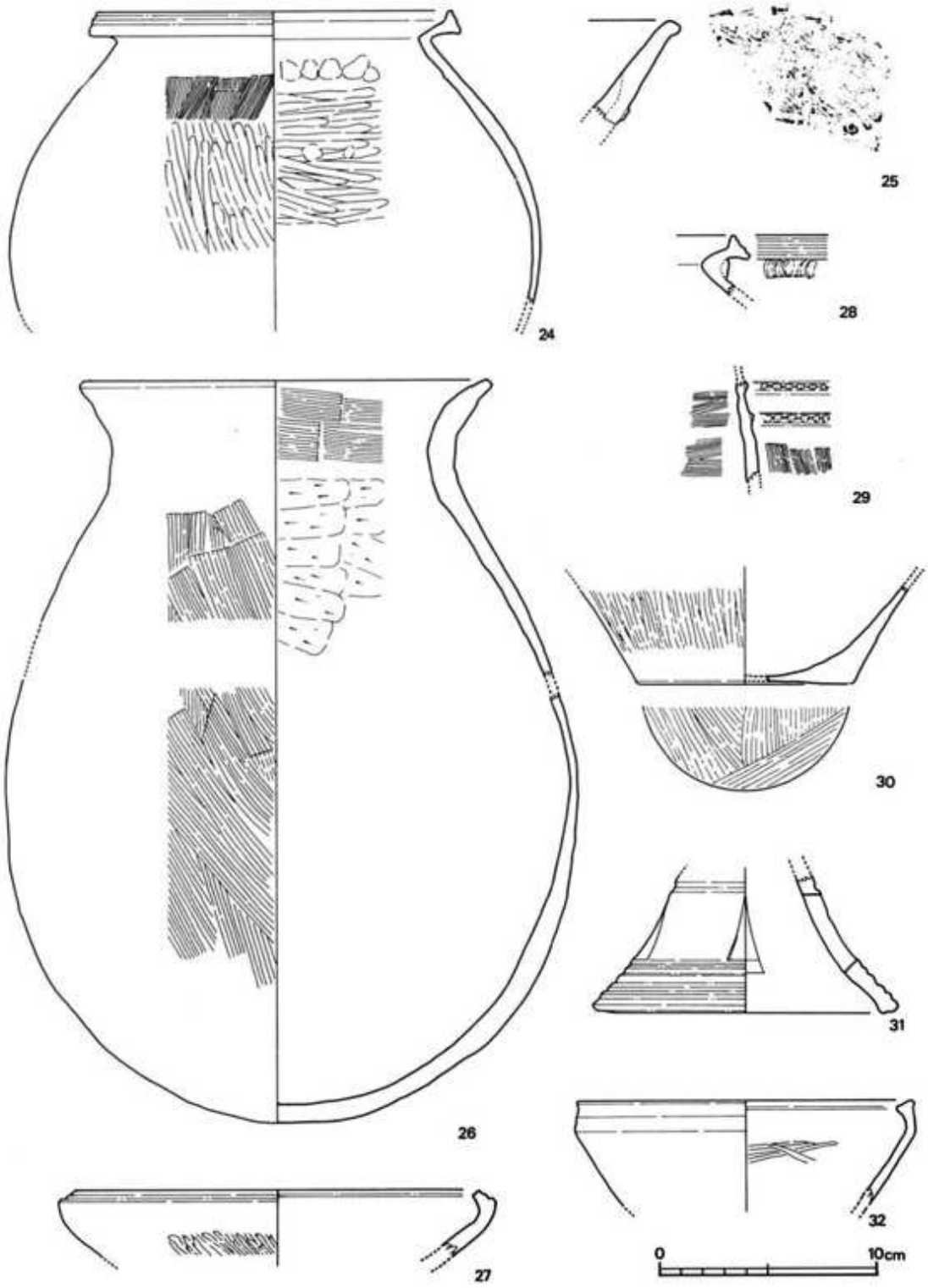
石器（第20図51、図版23の51）石材は黒色を呈する黒曜石である。最大長2.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.5cm、重さ1.4gである。

ＳＫ11

石器（第20図52、図版23の52）石材は黒色を呈する黒曜石である。最大長1.7m、最大幅3.1cm、最大厚0.4m、重さ1.6gである。

ＳＫ13

弥生土器（第18図30～32、第19図33～36、図版22の30～32、図版23の33～36）30は甕又は壺の底部で平底を呈する。体部は、底部からほぼ直線的に外上方にのびる。調整は、体部外面がヘラ磨き、内面がナデによる。底部外面は不定方向への単位の粗い刷毛。31は高杯の脚裾部で、脚柱部からラッパ状に開き、端部は矩形を呈する。脚柱部との境に凹線をめぐらすほか、脚端部にかけて５条の凹線をめぐらす。また、脚裾部には４箇所に三角形の透しがある。調整は、




**第18図　出土土器実測図(III)（1：3）**
(24・25:SB05、26:SB06、27～29:SK07、30～32:SK13)

脚端部の内外面及び裾部の外面を横ナデする。32は鉢で、口縁部は体部からやや内傾して立ち上がり、端面は内傾し浅く凹み、端部の直下外面も浅く凹んでいる。体部との境は不明瞭で、体部は、直線的に内下方に続く。調整は、口縁部の内外面を横ナデし、体部の外面を横位のヘラ磨き、内面は横位のヘラ磨きしている。33～35は甕で、33・34の口縁部は頸部から強く屈曲して外方へのび、端部はやや上方に拡張する。口縁部外面には、２条の凹線がめぐる。33の体部は緩やかにカーブして下方に続く。頸部直下には３条の沈線がめぐり、沈線間には刻目がめぐる。また、体部最大径付近には上下２段に櫛歯状工具による刺突文がめぐる。調整は、口縁部の内外面は横ナデ、頸部の内面はナデ。体部内面はやや粗い斜位の刷毛、外面は炭化物の付着が著しく調整は不明。34は口縁部の内外面とも横ナデである。35の口縁部は頸部から強く外反し、端部は上下方向に拡張し、外面に４条の浅い凹線がめぐり、頸部に粘土帯を貼付け刻目を施す。口頸部の内外面は横ナデし、体部の内面はヘラ削りである。36は鉢で、口縁部は頸部から強く外反し、端部はわずかに上下方向に拡張する。口縁部の外面に浅い２条の凹線がめぐる。体部は内湾して下方に続く。調整は、口頸部の内外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラ磨き、内面は粗い刷毛調整である。

ＳＫ17

縄文土器（第19図37～40、図版23の37～40）37～40は撚糸文状の文様を施した土器で、原体の施文の方向は、37・39・40がＲＬ、38はＬＲで、40は羽状となる。37には貼付け凸帯の剝落痕が残る。４点とも器壁は薄く、内面はナデによる。

ＳＫ18

縄文土器（第19図41、図版23の41）撚糸文状の文状を施した土器で、原体の施文の方向はＬＲである。器壁は薄く内面はナデる。淡黄褐色を呈する。

ＳＫ19

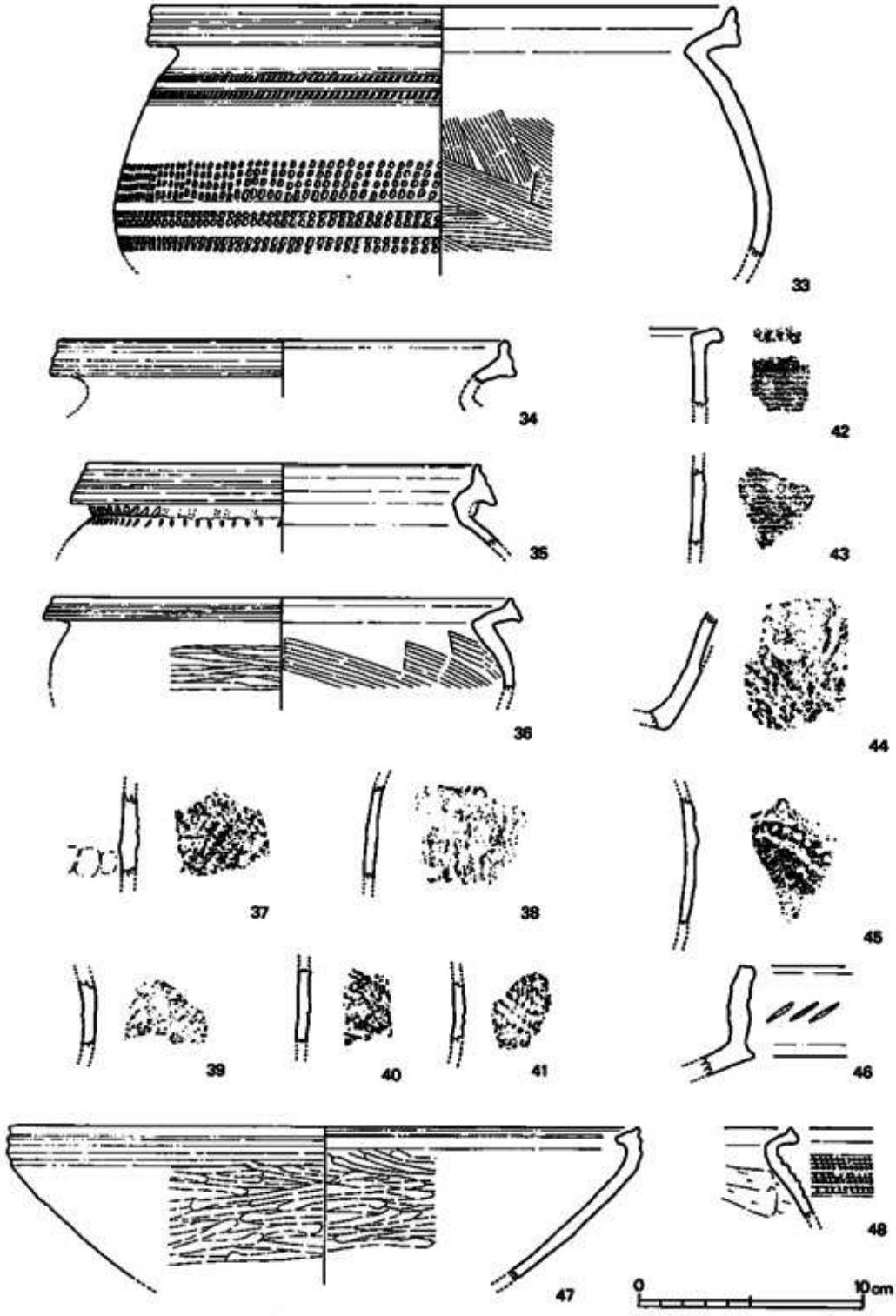
弥生土器（第19図46、図版23の46）壺で、口縁部はやや外傾して立ち上がり、端部は矩形を呈する。口縁部外面にはヘラ状工具により刺突文がめぐる。調整は、口縁部内外面とも横ナデする。

ＳＫ23

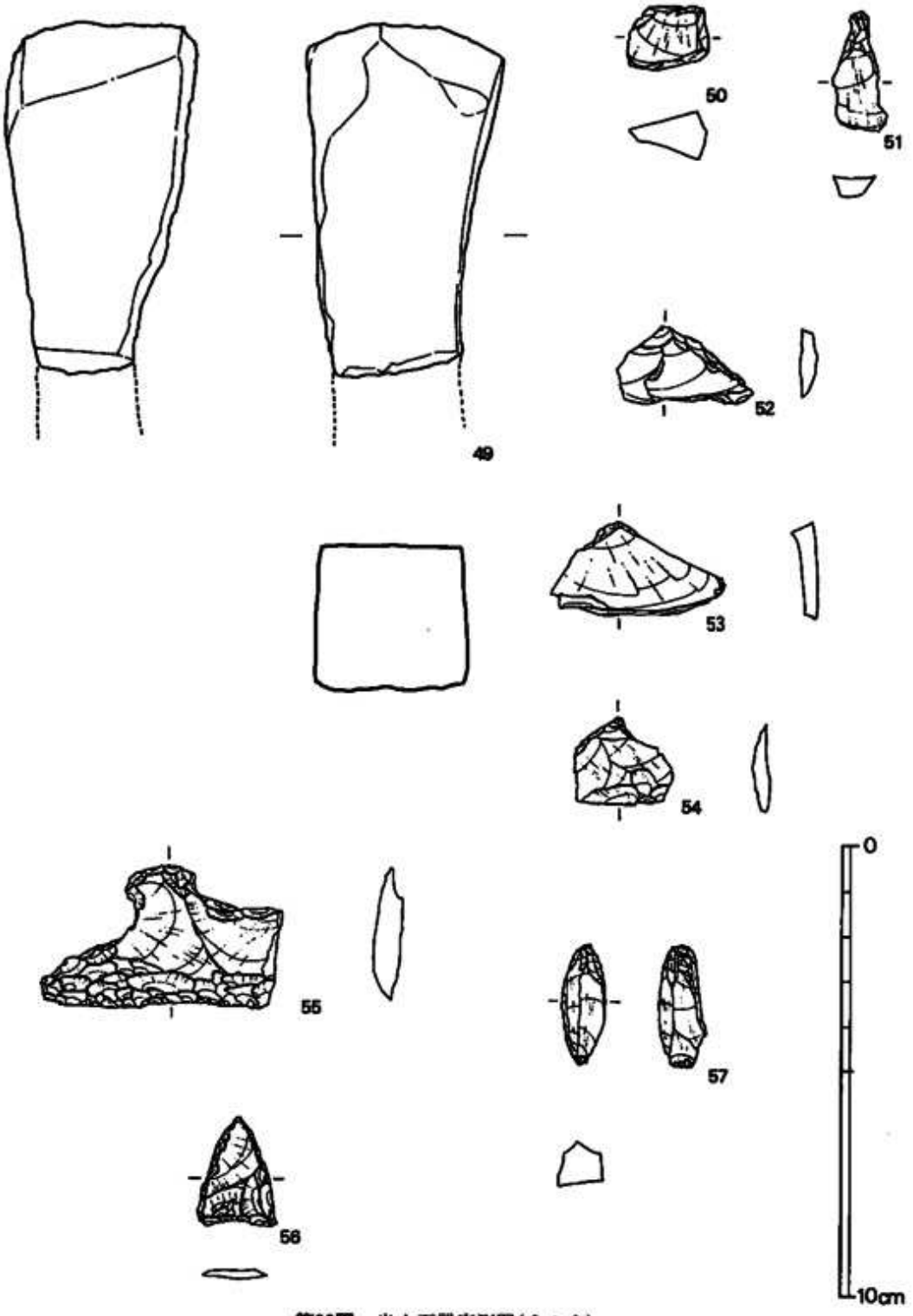
弥生土器（第19図47・48、図版23の47・48）47は鉢で、口縁部は体部から内湾気味に短くのび、端面は内傾して内外方向に拡張し、端面に２条、口縁部外表に３条の浅い凹線がめぐる。体部は、緩やかにカーブして下方に続く。調整は、口縁部の内外面を横ナデ、体部の内外面は横位のヘラ磨き。48は甕で、口縁部は頸部から外反し、端部はわずかに上方に拡張する。頸部直下に５条の凹線とヘラ状工具による刺突をめぐらす。調整は、口頸部の内外面を横ナデ、体部の内面はヘラ削りである。

ＳＤ01

弥生土器（第19図42・42、図版23の42・43）ともに前期末の甕で、42の口縁部は体部から逆




第19図　出土土器実測図(IV)（1：3）
(33～36：SK13、37～40：SK18、42・43：SD01、44・45：SD02、46：SK19、47・48：SK23)




第20図　出土石器実測図（2：3）
（49：SB02、50：SB03、51：SK10、52：SK11、53：SD01、54：SD02、55～57包含層）

L字形に屈曲し、端部はわずかに垂下させ、刻目を施す。口頸部直下には沈線をめぐらす。調整は器面剥落のため不明で、色調は淡黄褐色を呈する。43の体部外面には多条の沈線がめぐり、沈線直下には半截竹管による刺突文がめぐる。調整は不明である。

石器（第20図53、図版23の53）石材は安山岩である。最大長2.2cm、最大幅3.9cm、最大厚0.5cm、重さ3.6gである。

SD02

縄文土器（第19図44・45、図版23の44・45）44は網目状撚糸文土器の底部で、底部はややあげ底気味を呈する。原体の施文方向はLRである。調整は内面ナデ、暗茶褐色を呈する。45は船元式土器で貝殻腹縁による施文後低い凸帯を貼付け、この上を竹管による刺突を施す。器壁は薄く内面はナデ調整による。

石器（第20図54、図版23の54）石材は安山岩である。最大長2.1cm、最大幅2.2cm、最大厚0.4cm、重さ1.6gである。

遺構にともなわない遺物（第20図55～57、図版23の55～57）55は石匙である。一部が欠損しているが、横長を呈する。刃部は、特に主要剥離面側に丁寧な二次加工を施す。現存長5.2cm、最大幅3.1cm、最大厚1.6cm、重さ10.7gで石材は安山岩である。56は石鏃である。剥片を利用し、両側辺及び基部に細かな二次加工を加えている。最大長2.3cm、最大幅1.8cm、最大厚0.2cm、重さ1.4gで、石材は安山岩である。57は楔形石器である。若干幅ある縦長の剥片を利用し、上下両端に使用による細かな剥離がみられる。最大長2.6cm、最大幅1cm、最大厚1cm、重さ2.9gである。石材は黒色を呈する黒曜石である。

## (VI) まとめ

今回の行年遺跡の発掘調査では、縄文時代から古墳時代にかけての集落跡を確認し、山間地域における一つの集団の在り方の新たな資料を提供した。しかしながら、同地域を含め、周辺地域における集落跡などの遺跡の実態については明らかにされていないのが現状であり本遺跡の位置付けについては今後の調査に待つとして、ここでは今回の調査における成果について若干の問題点を整理して、まとめにかえたい。

まず、本遺跡の立地条件について考えると、山間部の小河川を前面にひかえた丘陵先端部に立地する。河川との比高は約15mあり、丘陵の東側及び西側には小さな谷が湾入している。また、本遺跡の立地する丘陵は傾斜変換点が丘陵先端部に近い所にある。このようなことから本遺跡全体の在り方を考えた場合、とくに本遺跡検出の弥生時代集落については、その生産基盤の低さ及び集落形成にもとめられ占有面積においても、以上のような条件から、本遺跡が完結的在り方を示すものと考えられる。これらのことを考慮しつつ、以下、縄文及び弥生時代の遺構について述べてみたい。

本遺跡検出の遺構群のうち、縄文時代に属すると考えられる遺構はＳＫ17である。この土坑の平面形は円形で、断面は方形を呈し、覆土は弥生時代の遺構のものとは若干異っている。また、少量の縄文時代中期後半の土器片と礫を検出している。土坑の性格については明確にはできないが、貯蔵穴の可能性が考えられる。ところで、周辺地域の縄文時代の遺跡には同町所在の扇原遺跡[1]、神石郡三和町所在の柿の木原遺跡[2]、世羅郡甲山町所在の頓迫遺跡，世羅町所在の東神崎大池遺跡[3]などがあげられるが、これらの遺跡については表採資料のみで、遺構の存在については明確にされていない。ただし、遺跡の立地条件を見たとき、本遺跡を含め小河川に面した低丘陵上に位置するなどの共通点が見られる。

県内において縄文時代の貯蔵穴検出の遺跡としては、神石郡東城町所在の帝釈峡遺跡群の名越遺跡[4]があげられる。同遺跡は、未渡川に隣接した岩陰遺跡で縄文時代早期から須恵器・土師器を包含する表土層まで11層にわたる文化層が確認されている。このうち、遺構としてはとくに縄文時代後半～晩期にかけての柱穴群、中期～晩期にかけての貯蔵穴群の存在が注目されており、また、縄文時代晩期の粗圧痕土器を検出したことで有名である。このうち、貯蔵穴群は中期のもの３基、後期のもの５基、晩期のもの６基で、大半が平面形は円形で断面Ｕ字形を呈している。これらの貯蔵穴群は湧水性に富んだ地層に掘込まれていることから、山口県平生町の岩田遺跡[5]、岡山県山陽町の南方前池遺跡[6]検出の貯蔵穴との共通性が論じられている[7]が、名越遺跡では出土の遺物内容から、木の実などのアクやシブ抜きを前提とした貯蔵穴以外の性格の可能性が指摘されている[8]。本遺跡ＳＫ17を貯蔵穴と考えた場合、丘陵土の粘質土に掘込んでいることから考えて湧水性に富むとは言いがたい。このことは、前述のアク抜き等を前提とした

木の実類の貯蔵条件とは若干異なる食物類の貯蔵を考慮すべきであろう。なお、ＳＢ03覆土中から縄文早期の楕円押型文土器が出土していることから、この時期の遺構の存在も予想されると同時に、本遺跡の上限が縄文時代早期までさかのぼるものと考えられる。

次に、弥生時代の遺構についてみると、住居跡６軒、袋状ピット２基などがある。また、一部の掘立柱建物跡については時期を明確にはしがたいが、少量の弥生土器を覆土中に包含することから同時期の可能性が考えられる。また、２本の溝状遺構も袋状ピットとの切合い関係から同様に弥生時代の可能性が考えられる。

住居跡は、中期がＳＢ01・05の２軒、後期前半がＳＢ03の１軒、及び時期を特定できないSB04－ａ・ｂの２軒がある。このうち、SB01、04－ａ・ｂを除いて平面形が方形・隅丸方形を呈し、ＳＢ01が尾根筋上に立地したと考えられるほかは尾根筋よりやや下った斜面に位置している。また、ＳＢ05は丘陵斜面に営まれており、山側を掘削し斜面側に盛土して造成したと考えられ、他の住居跡との間にやや相違が認められる。一方、住居構造としては床面流失の著しいＳＢ05を除いて住居跡中央にピットを有し４本以上の主柱をめぐらす構造となっている。また、ＳＢ03は焼失家屋で垂木、壁板などの炭化材の残存状況は良好である。出土状況から垂木が住居跡中央を中心に放射状となることや、壁際には壁崩落防止のための壁板が立てられ、これを木杭で支えていた状況が明らかとなった。

袋状ピット２基は、ともに中期後半に属し、丘陵尾根筋にある。ともに床面が丸味をもち、断面フラスコ状になるなどの共通した特徴をもつ。覆土中から動・植物遺体は検出されていないが、貯蔵穴として機能した可能性が考えられる。一方、掘立柱建物跡については、ＳＢ09を除いて規模が相対的に小さく、倉庫的性格をもつものと考えられ、袋状ピット同様丘陵尾根筋に分布する状況を示すが、袋状ピットとの関係では比較的接近して位置する。これら両者間では掘立柱建物跡の時期が特定できない以上、その同時性について論じることはできないが、掘立柱建物跡を倉庫と考えた場合、この両者間の貯蔵物の内容の相違ないしは、時期的な相違による貯蔵形態の変化をうかがうことができよう。

また、溝状遺構については、周辺遺構との密着な関係を裏付けるものはなく現状としては性格不明と言わざるを得ない。

弥生時代の遺構については、これらのことから住居跡と袋状ピット及び掘立柱建物相互間には、遺跡内における占地の相違が認められる。つまり、住居跡は相対的にやや丘陵尾根筋より下がった斜面に位置するものが多いのに対し、貯蔵を目的とした袋状ピット及び倉庫的性格と考えられる掘立柱建物跡は尾根筋に立地する。このことは、集落内における生活空間利用についての集団内の規制による以外に、当時の貯蔵用食物の保存条件に起因する点が多かったものと思われる。つまり、穀物類を主体としたと考えられる弥生時代の食料形態の中では、貯蔵を目的とした施設は縄文時代の樫果類の貯蔵形態とは異なり、通気性の良好な場所に占地したと考えられる。また、集団内におけるこれらの管理体系については集団規模及び集団を取り巻く

地理的成因に大きく依存する点が多いのではないかと思われる。つまり本遺跡の場合、時期的対応関係が明らかとなっているものについてみると中期後半の住居跡2軒に対し、貯蔵穴が2基存在し、あたかもこれらが個々の家に付属するかのようにとらえられるが、その生産基盤をなすべき可耕地は限定されており必然的に集団の規模が押さえられる結果となる。これに対して、大河川流域を背景とした地域の集団は、その集団内における規制もさることながら、各集団間における規制が強化され貯蔵体系についても異なる様相を示すと考えられる。このことを示すものとしては、近年調査が実施されている福山市駅家町所在の石鎚権現遺跡群[9]中の貯蔵体系が認められる。この遺跡群は、本遺跡とは若干時期的に下るものの、居住空間、埋葬空間、貯蔵空間が比較的距離をおいて場所の選定が行なわれており、明らかに本遺跡との在り方の相違が認められる。

このように大きな河川流域を背景とした地域と狭小な谷水田を背景とした山間地域とでは、その生産基盤に大きな差が生じ、このことによる集団間の規制の内容に相違が生じたものと考えられよう。しかしながら、本遺跡の場合、前述のように周辺遺跡の調査が進展しておらず、遺跡相互間の関係や、本遺跡の占める位置については、不明な部分が多々あり、今後の調査に待ちたい。

註

(1) 服部宜昭・妹尾周三「甲奴郡上下町扇原から発見された縄文時代の遺物について」『芸備』第6集 芸備友の会 昭和53（1978）年

(2) 三和町教育委員会『広島県神石郡柿の木原遺跡の調査』昭和52（1978）年

(3) 小都 隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」『芸備』第5集 芸備友の会 昭和52（1977）年

(4) 川越哲志「帝釈名越岩陰遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』昭和51（1976）年

(5) 潮見 浩・川越哲志・川越俊一『岩田遺跡』山口県平生町教育委員会 昭和49（1974）年

(6) 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」『私たちの考古学』第7号 考古学研究会 昭和31（1956）年

(7) 潮見 浩「縄文時代の食用植物」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論集—』昭和52（1977）年

(8) 前掲書(4)

(9) 広島県立埋蔵文化財センター編『石鎚権現第2号古墳発掘調査報告』昭和59（1984）年

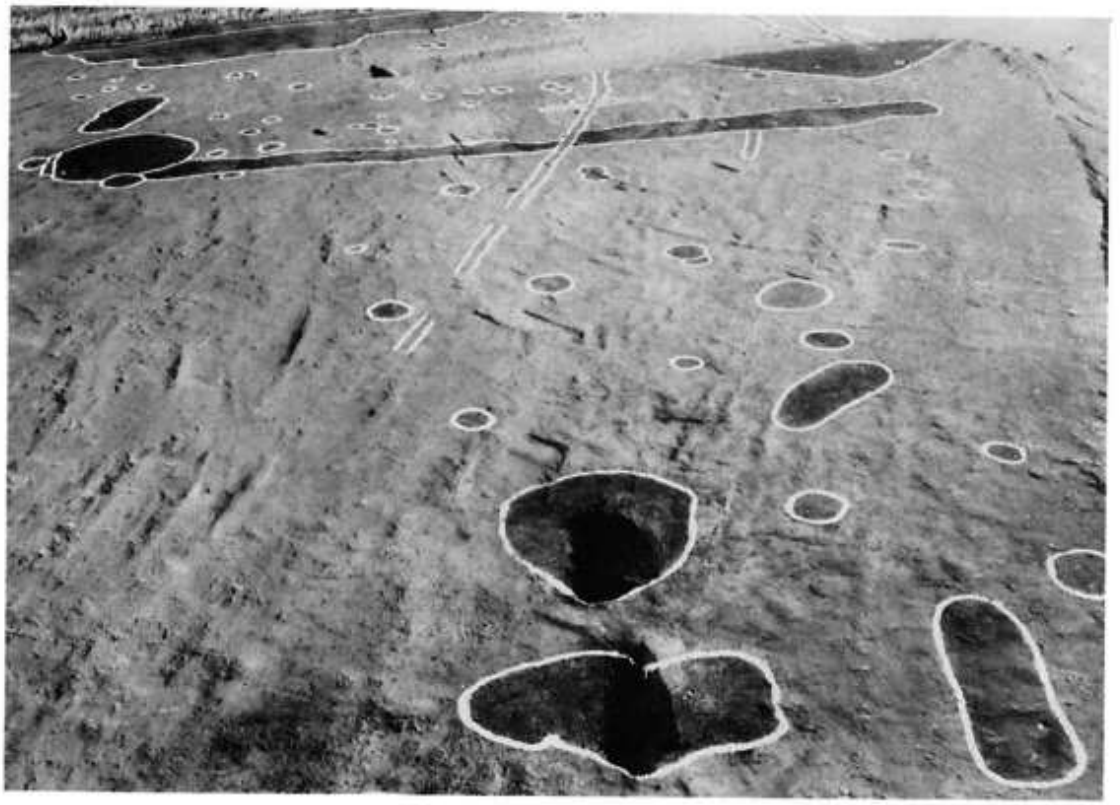
図版1

a遺跡遠景(北東より)

一b遺跡近景(南より)

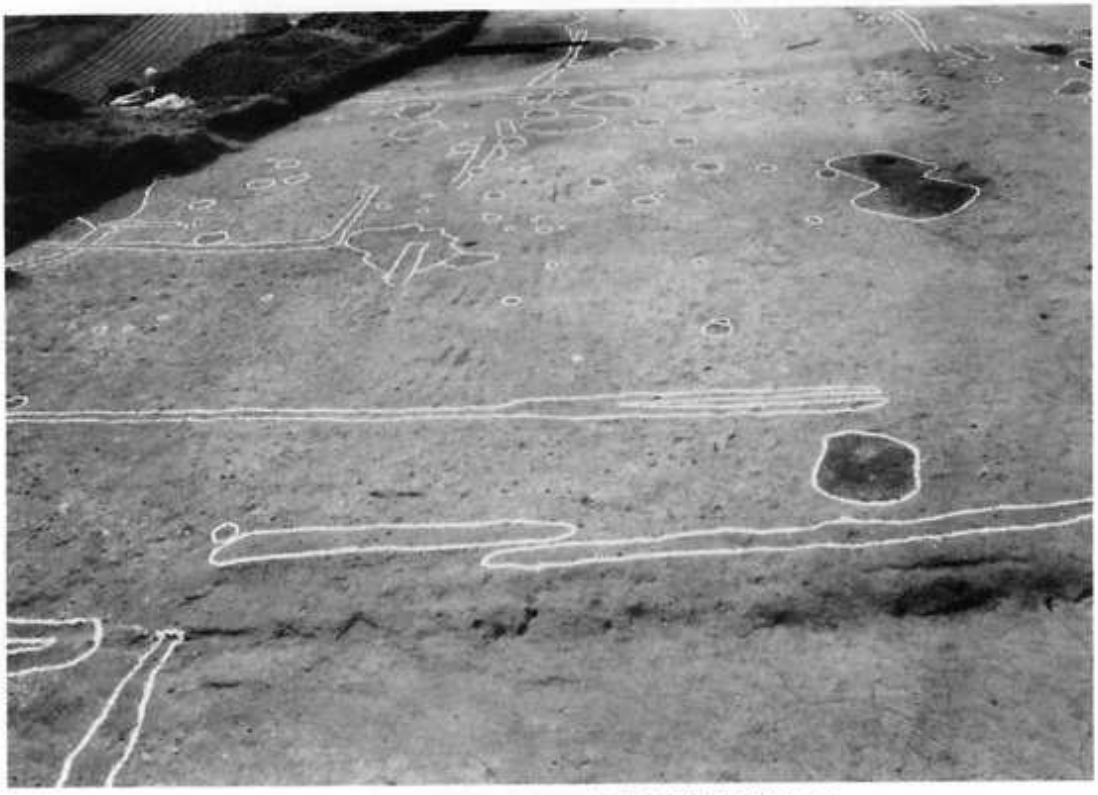
図版2

a 遺構検出状況・全景(南より)



b 同上・調査区中央付近(南より)

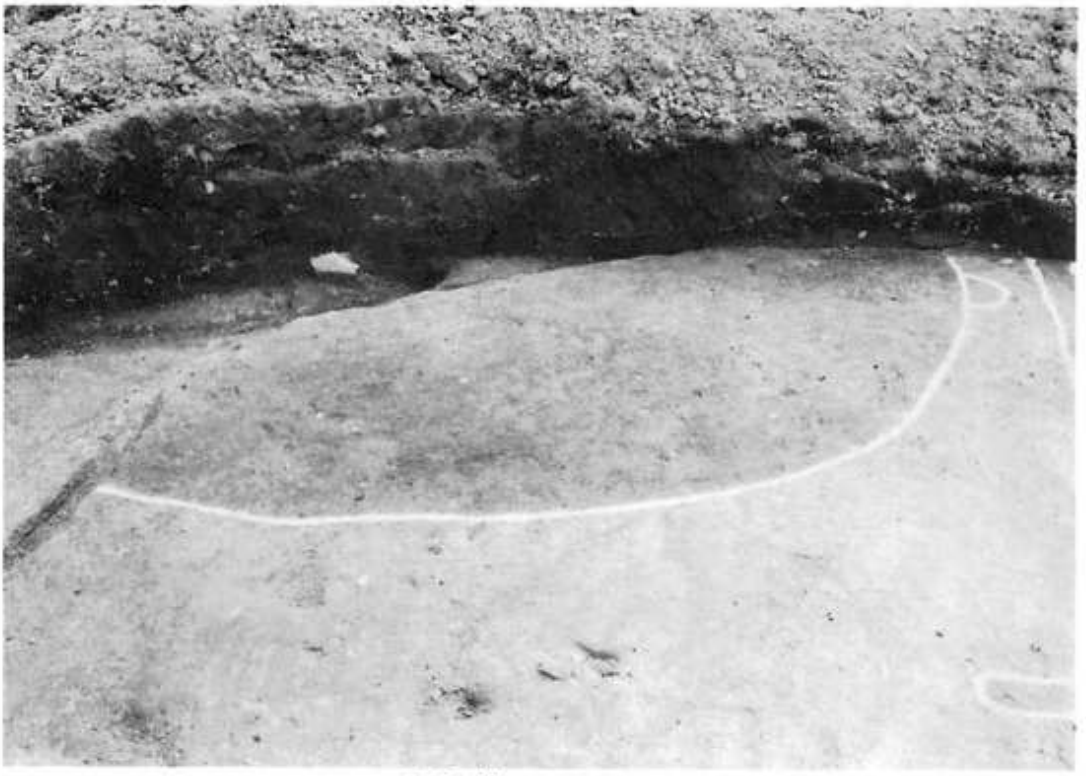
図版3



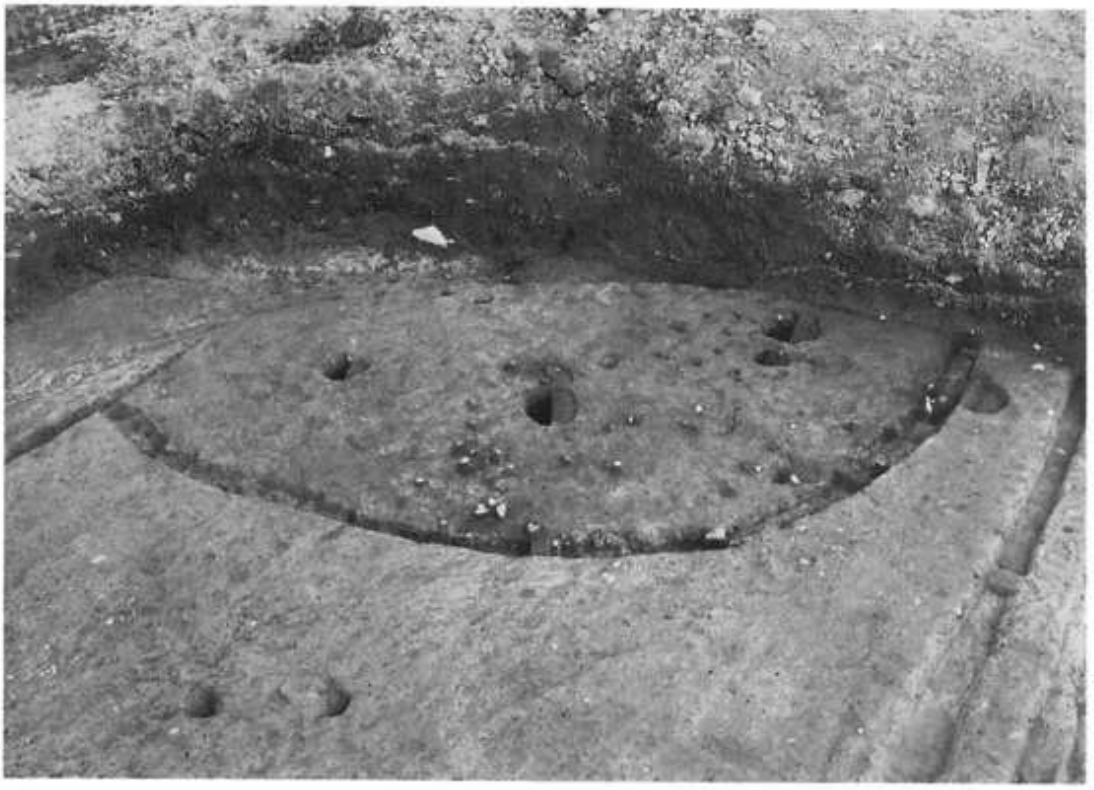
a 遺構検出状況・調査区東側付近(北より)

b 同上・調査区北側付近(南東より)

図版4

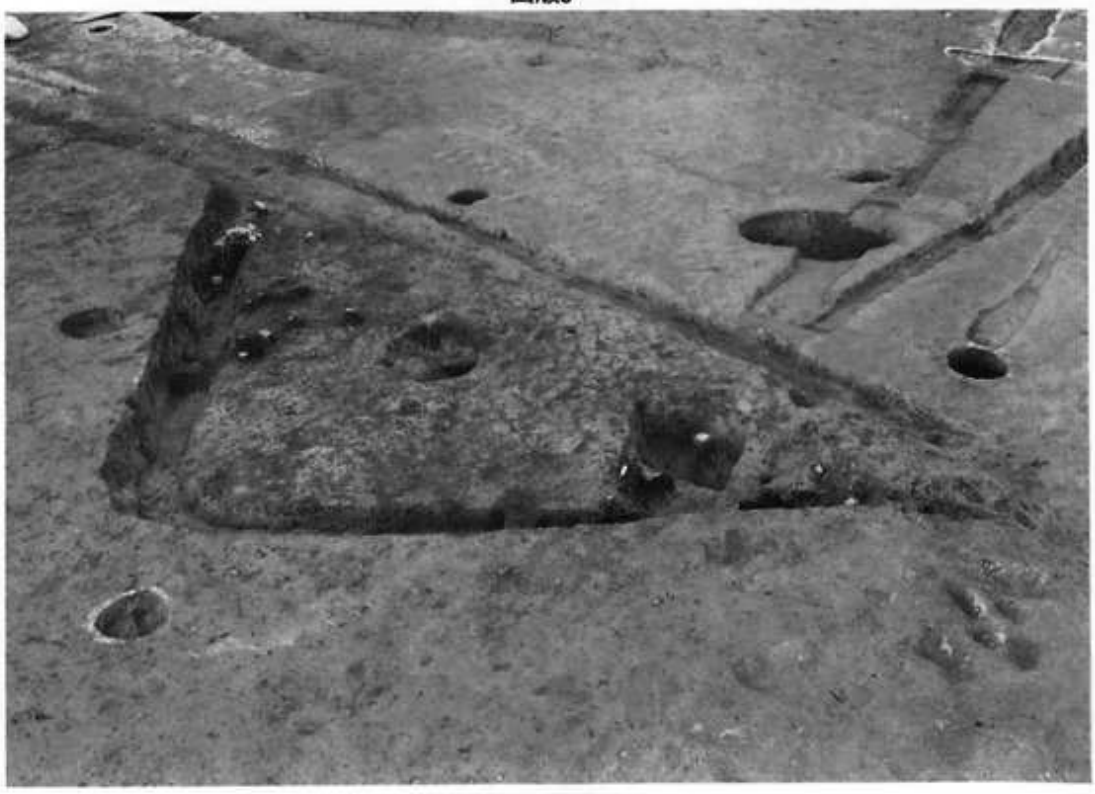


a SB01 検出状況(西より)

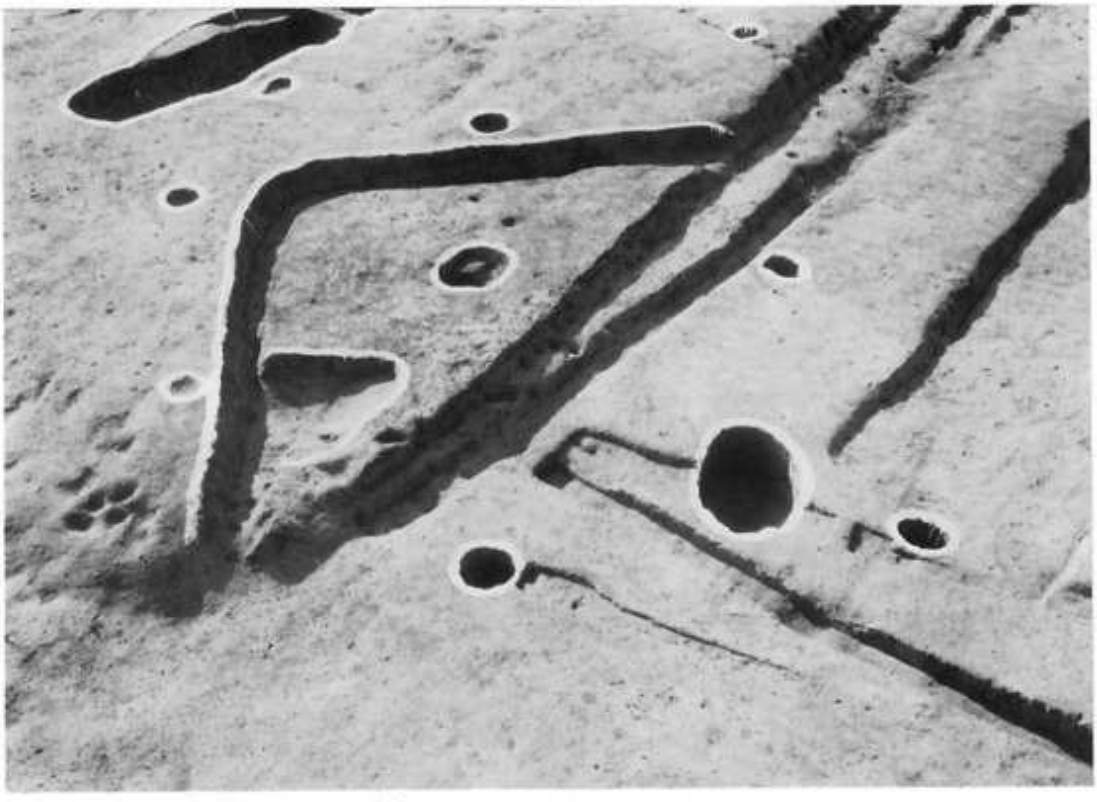


b 同上・完掘状景(西より)

図版5



a SB02 完掘状景(南東より)



b 同上・完掘状況(北東より)

図版6

a SB03 検出状況(西より)

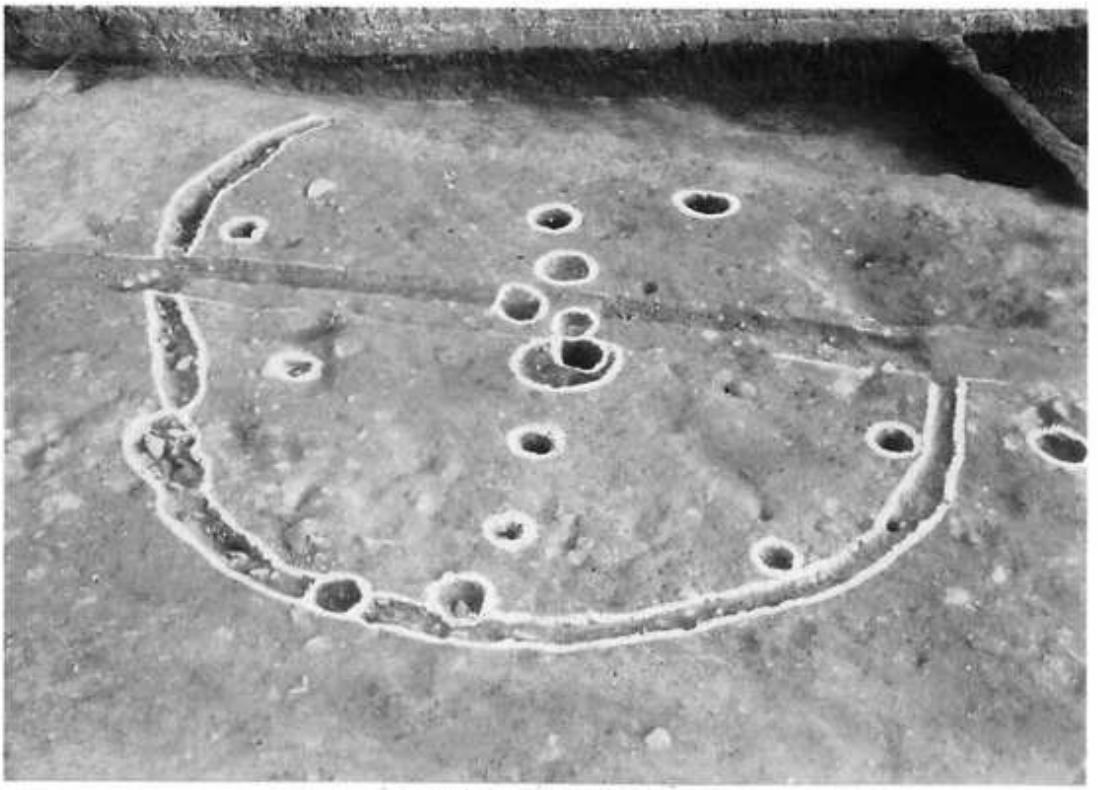
b同上・炭化材検出状況(南西より)

図版7

a SB03 遺物出土状況

b同上・完掘状況(西より)

図版8



a SB04 完掘状況(西より)

b SB05・06 検出状況(西より)

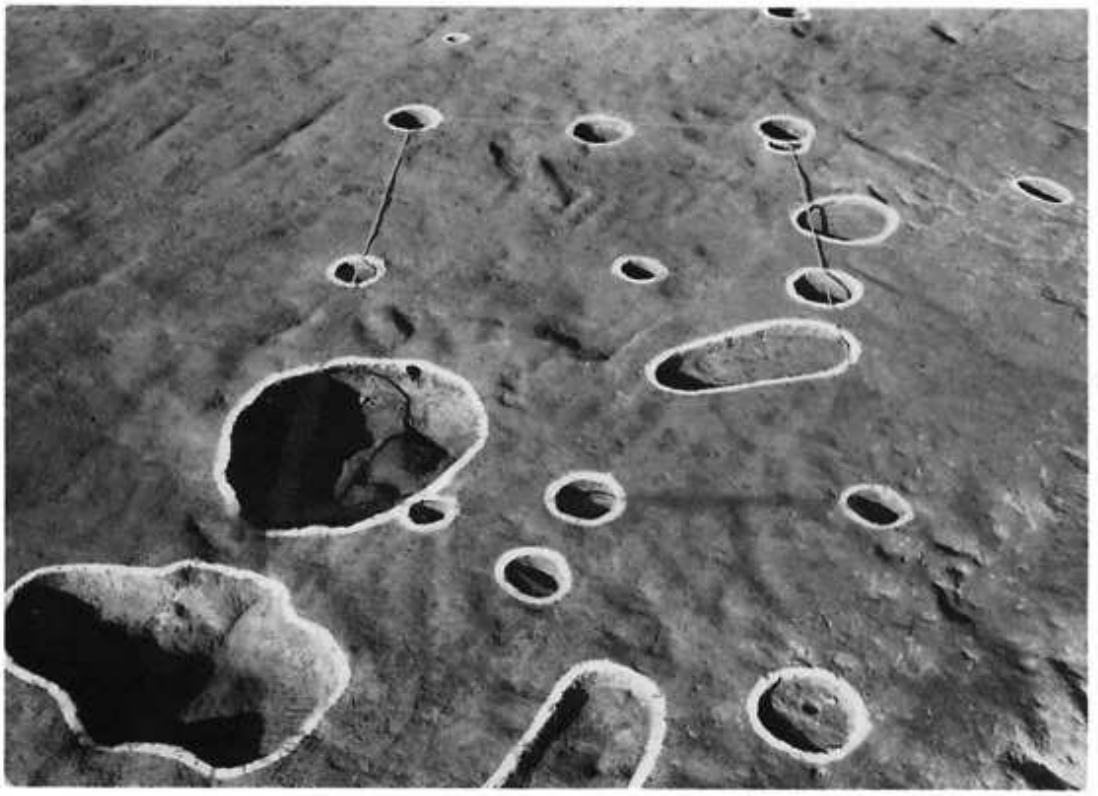
図版9

a SB05・06 完掘状況(西より)

b SB06 遺物出土状況(西より)

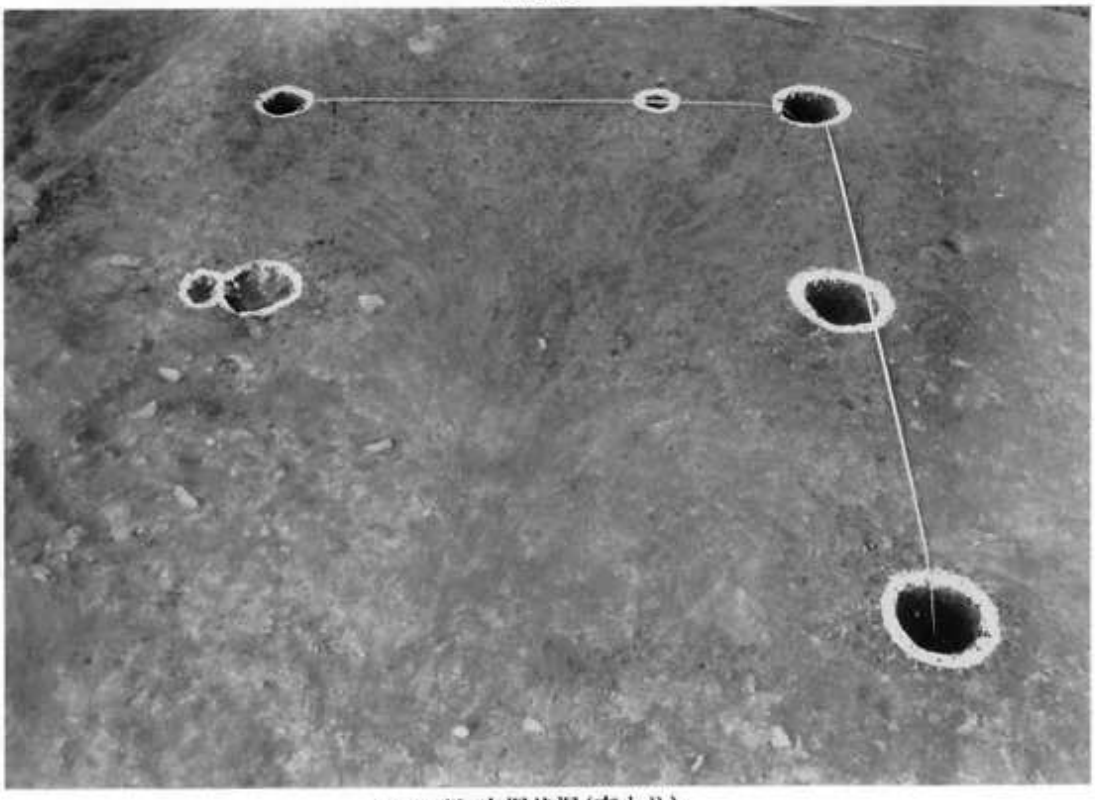
図版10

a SB07・完掘状況(南より)

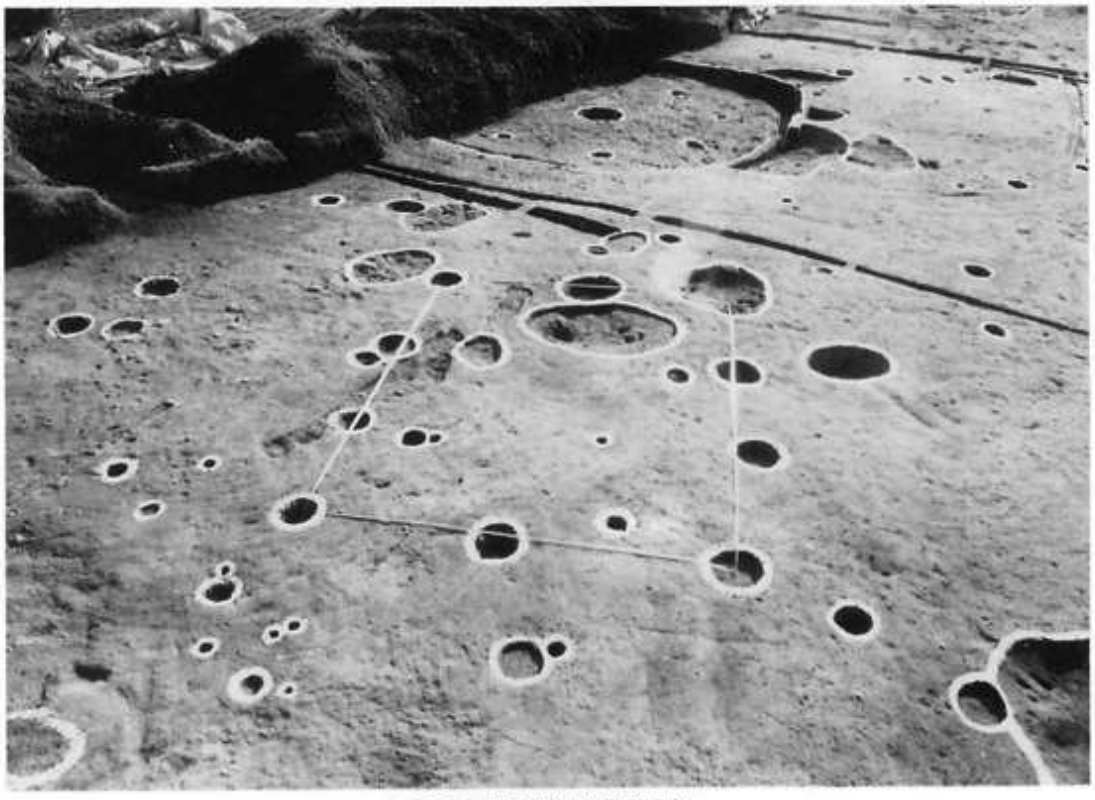


b SB08・完掘状況(南より)

図版11

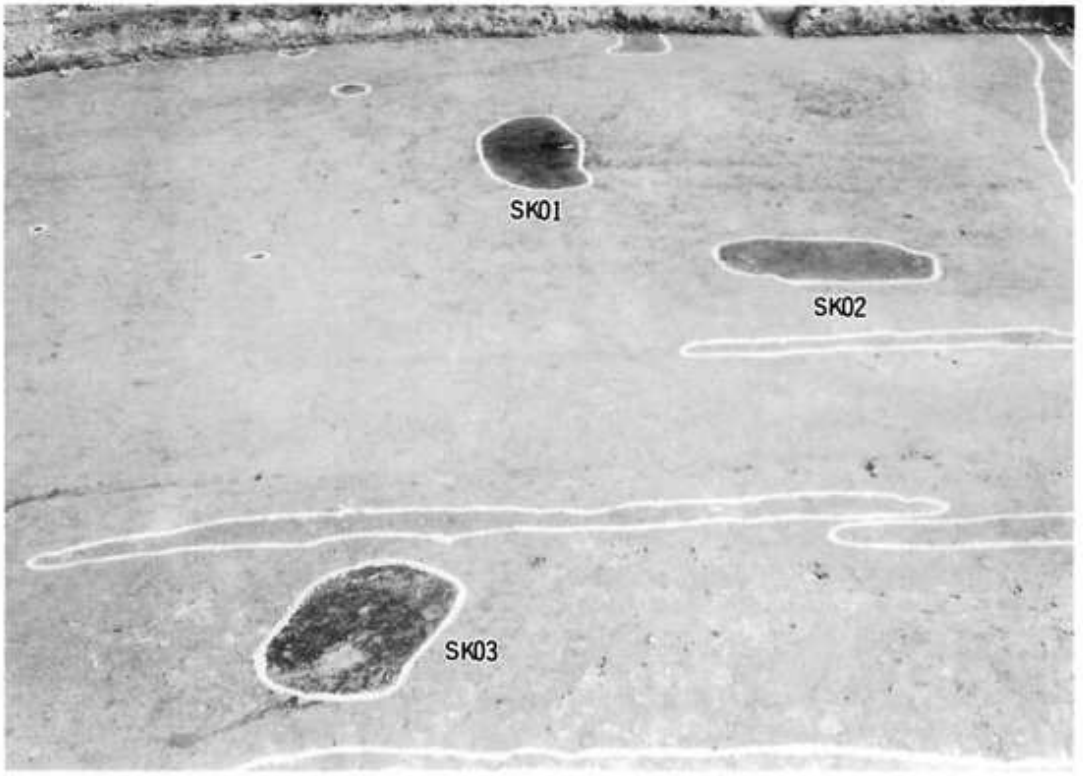


a SB09・完掘状況(南より)

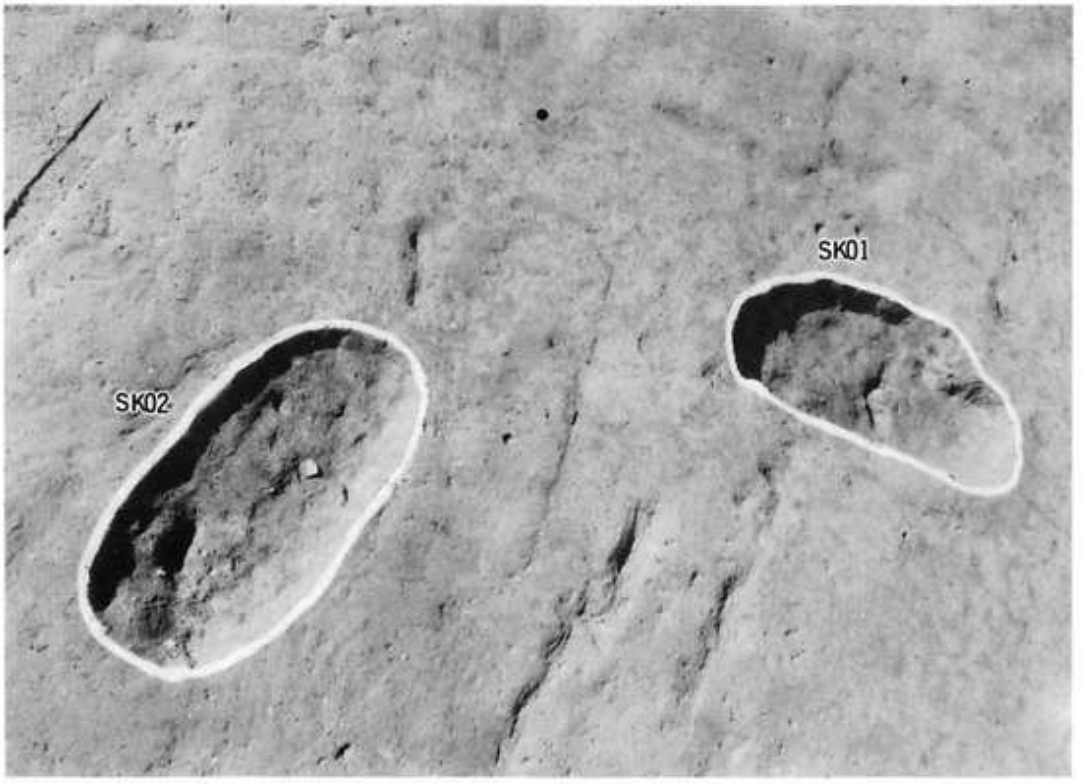


b SB10・完掘状況(北より)

図版12

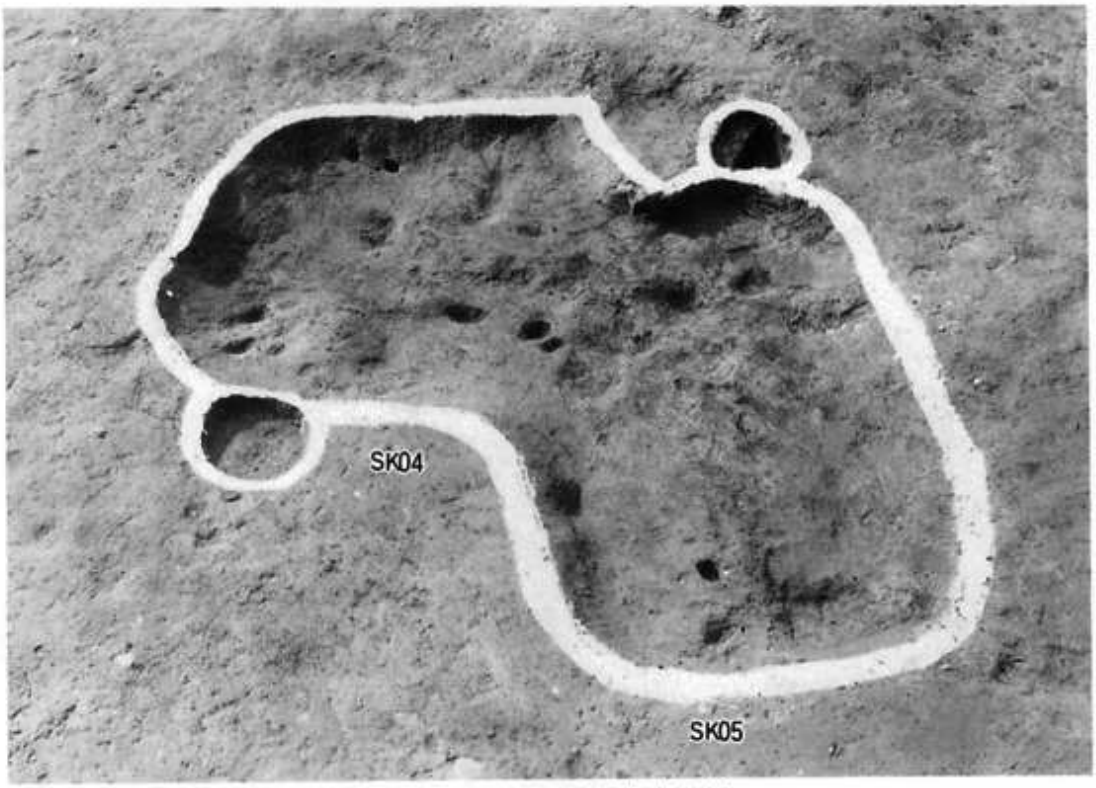



a SK01～03検出状況(南より)

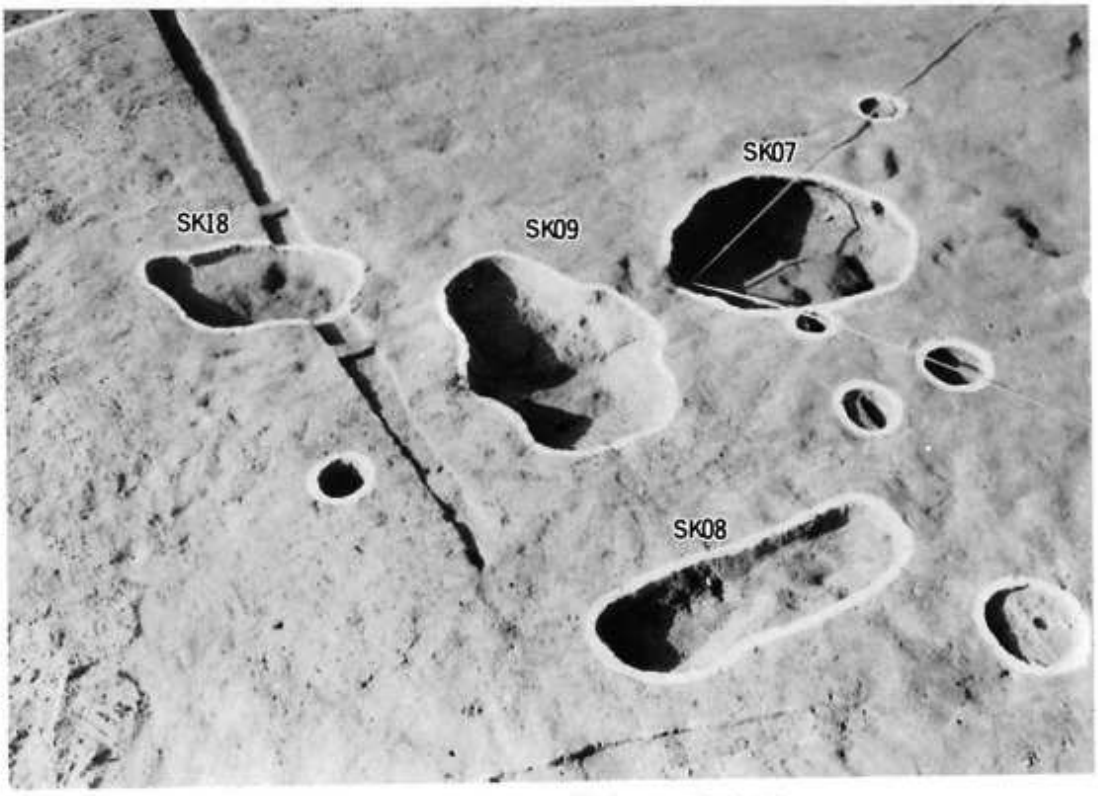



b SK01・02完掘状況(東より)

図版13

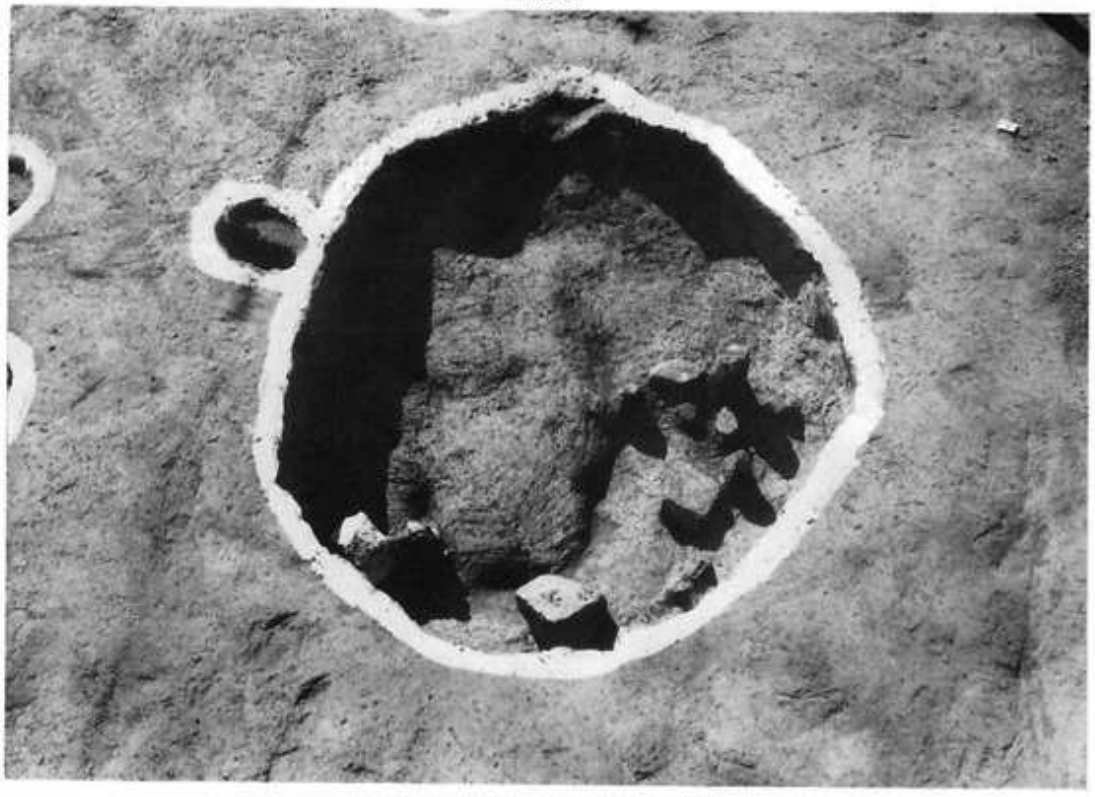



a SK04・05完掘状況(北東より)




b SK07～09・18完掘状況(北東より)

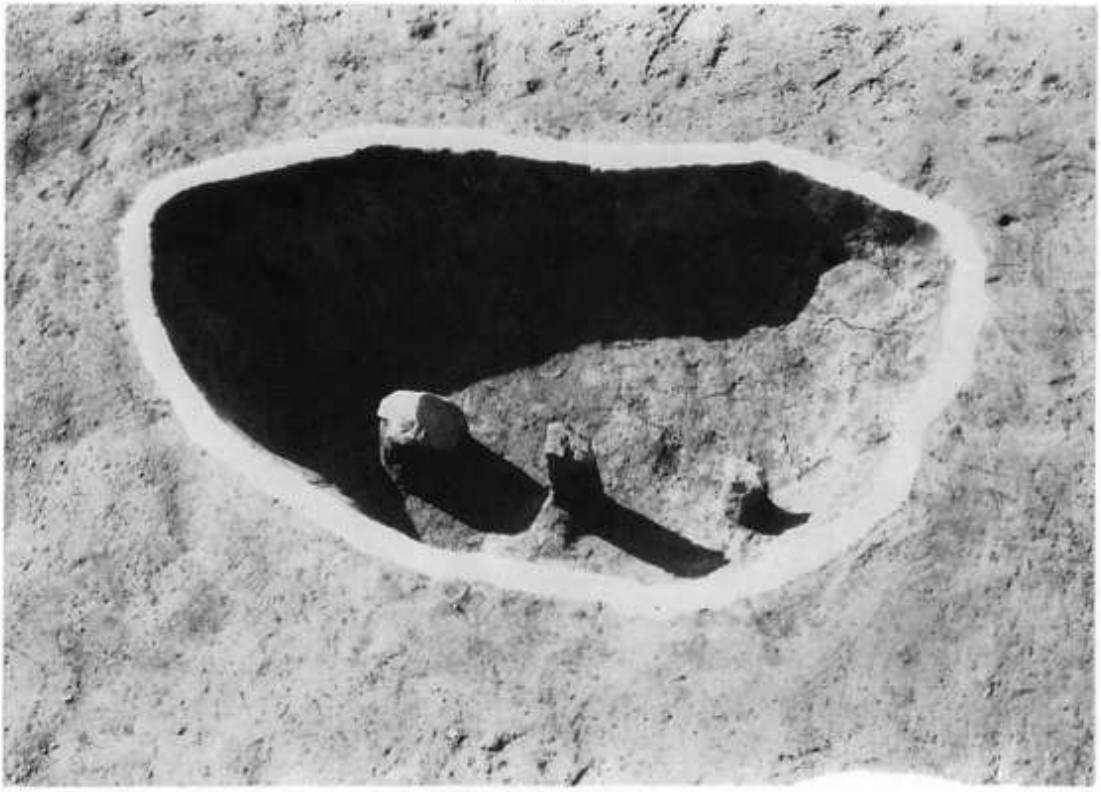
図版14



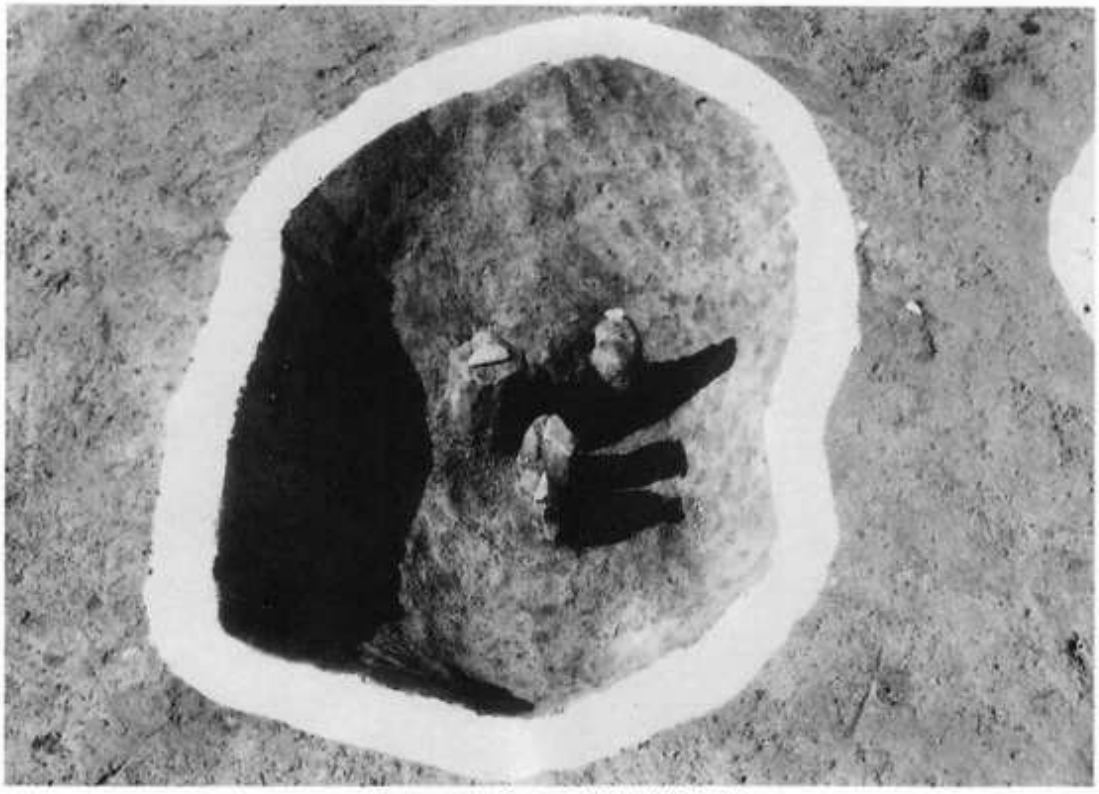
a SK07遺物出土状況(北より)

b SK18遺物出土状況(北より)

図版15



a SK11遺物出土状況(東より)



b SK12遺物出土状況(南東より)

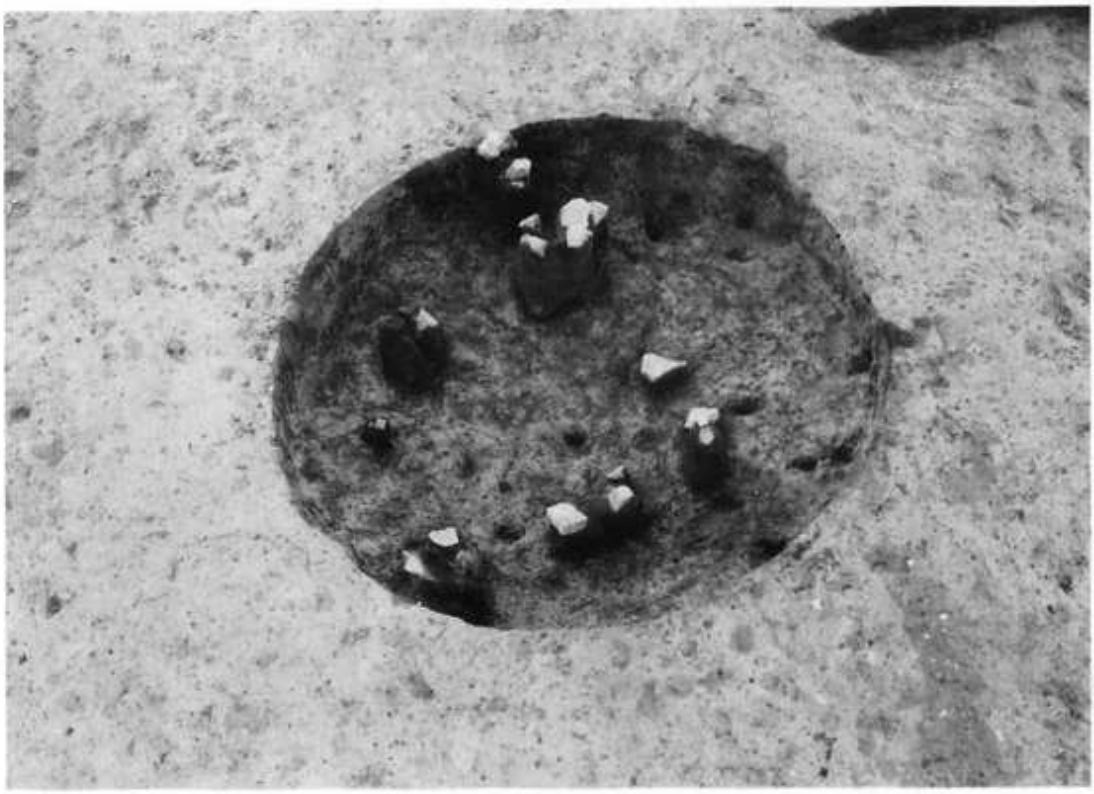
図版16

a SK13遺物出土状況(東より)

b同上・完掘状況(東より)

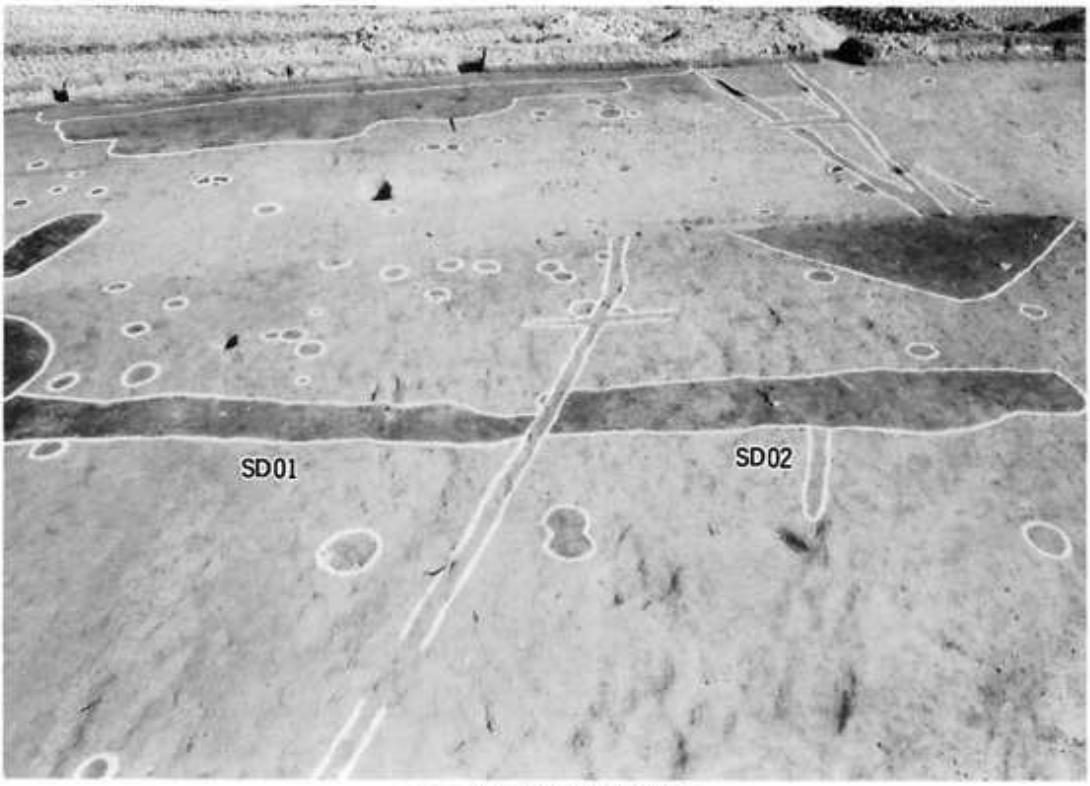
図版17

a SK16遺物出土状況(南より)



b SK17遺物出土状況(南東より)

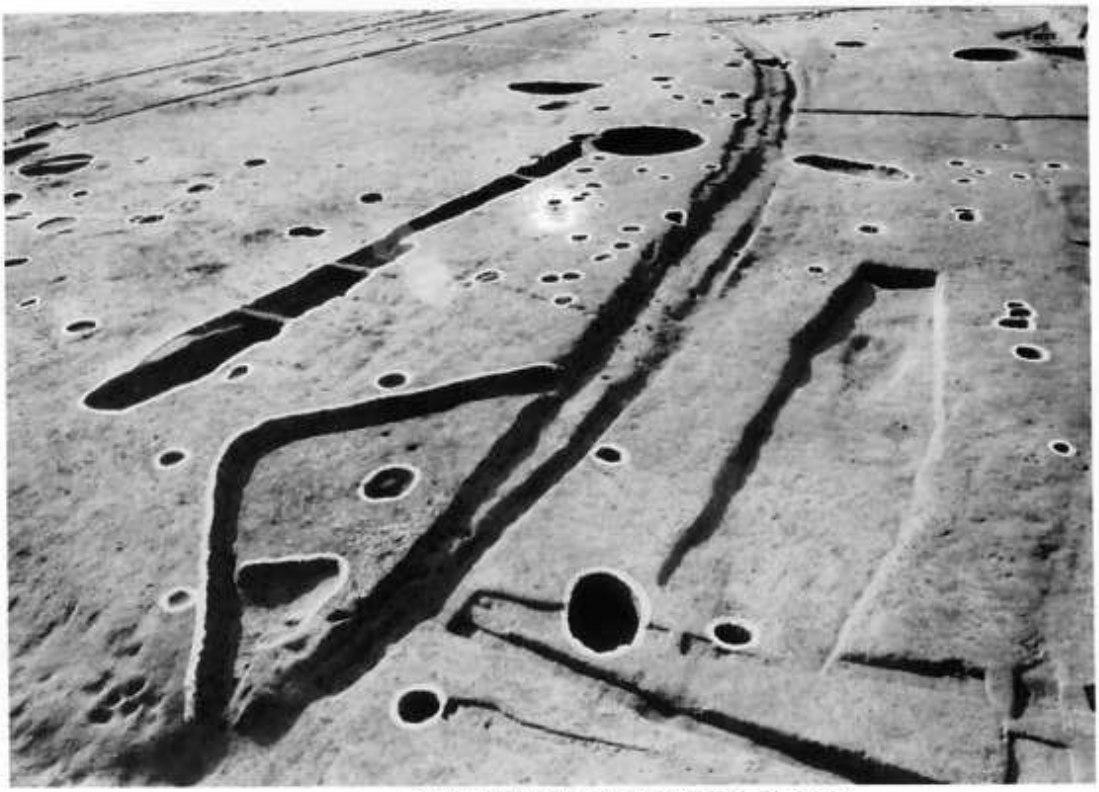
図版18




a SD01・02検出状況(南より)

b同上・完掘状況(東より)

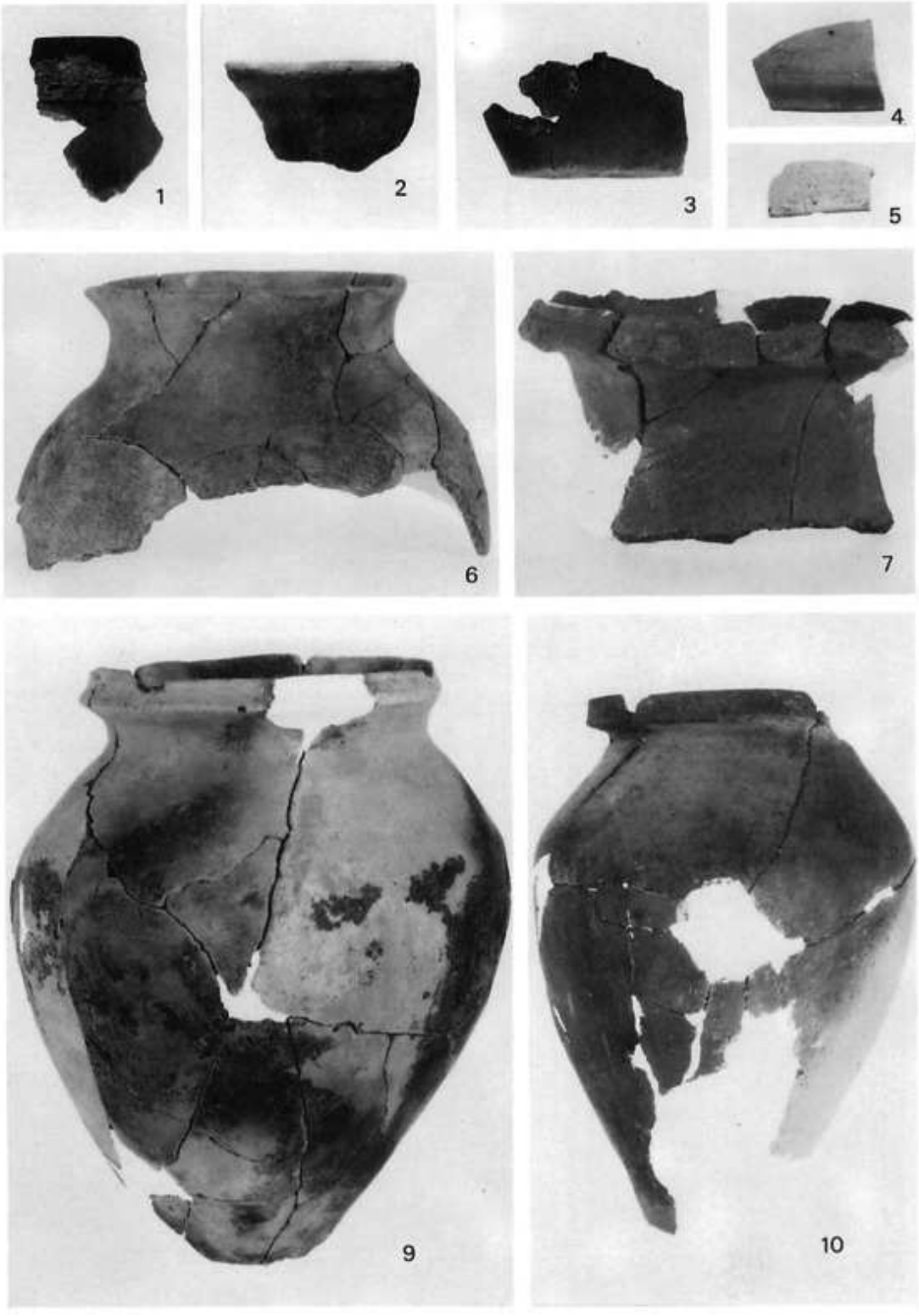
図版19



a 遺構完掘状況・調査区北側付近（東より）

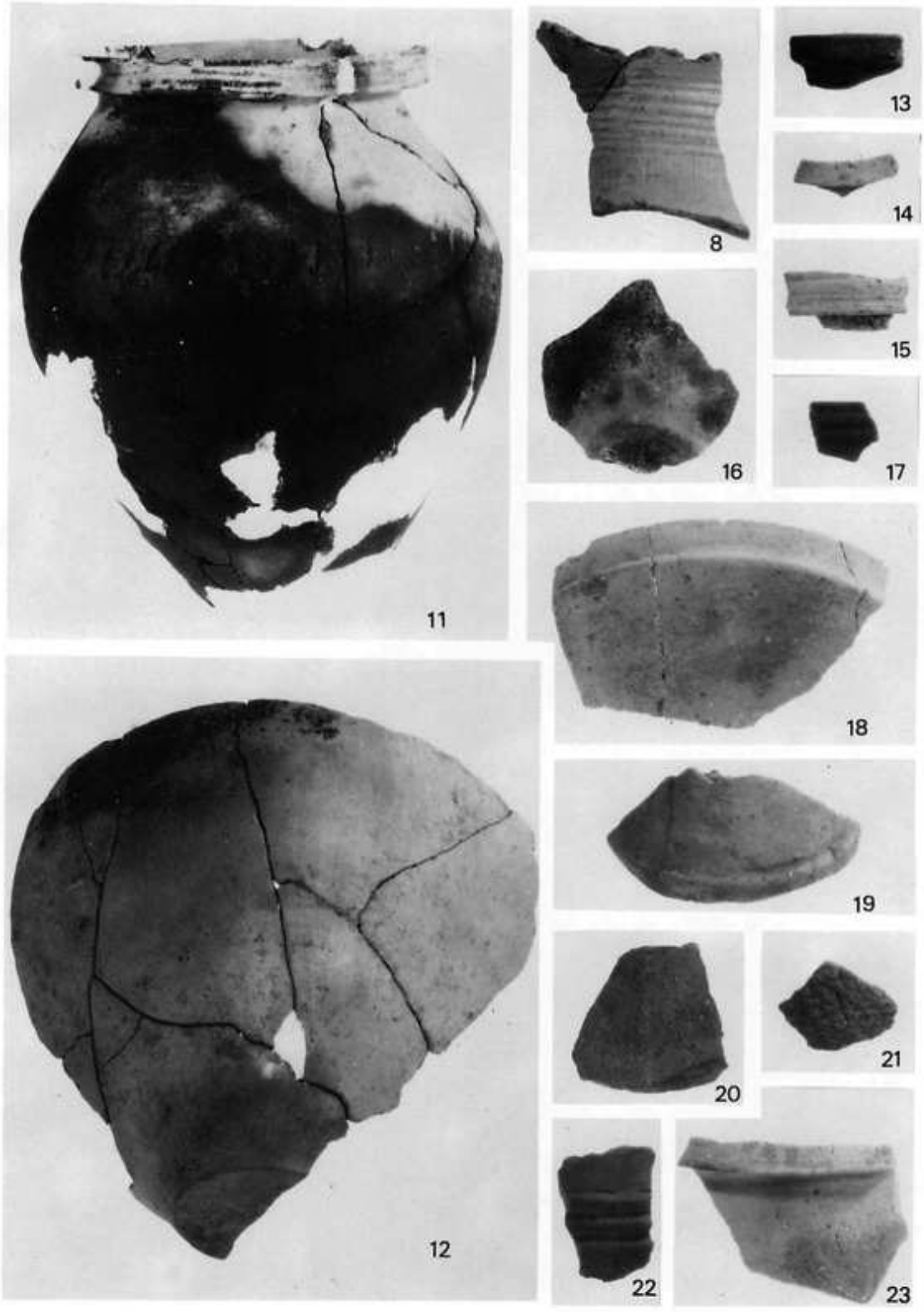
b 同上・調査区東側付近（北より）

図版20




出土遺物(I)

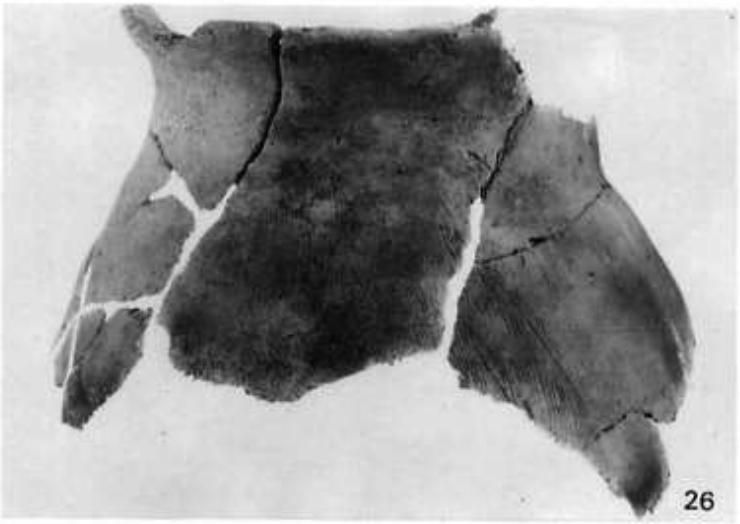
図版21

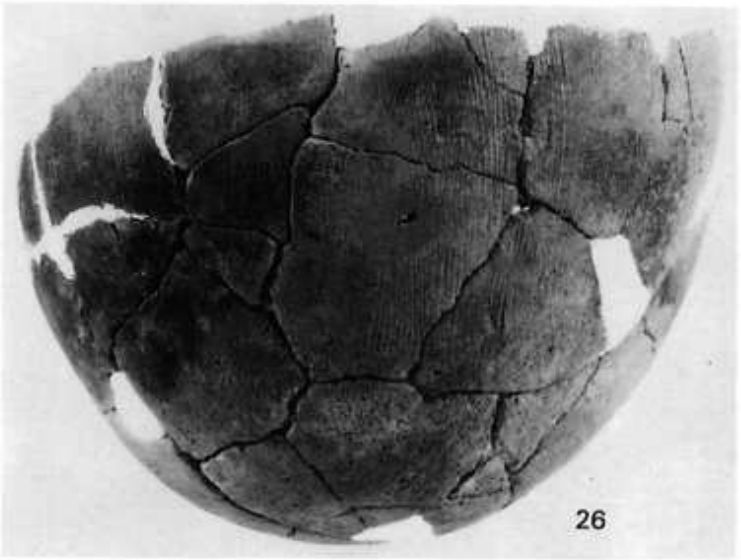


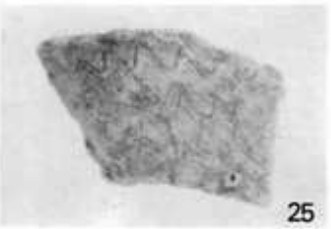

出土遺物(Ⅱ)

図版22

24


26


26

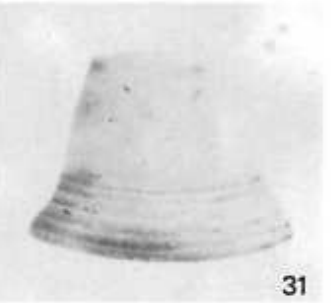

25

27

28

29

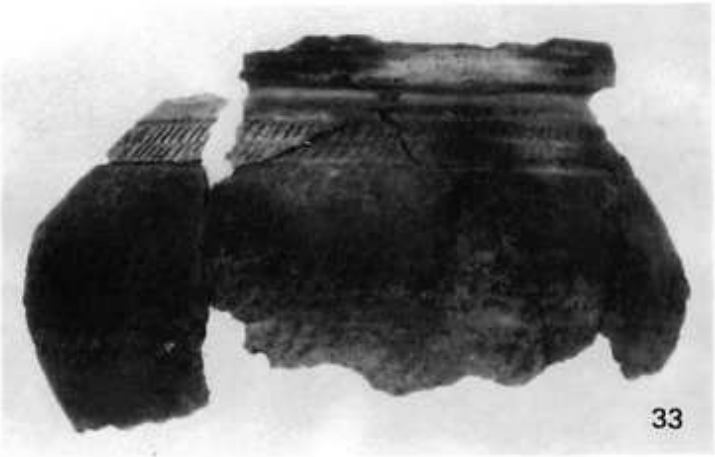
30


31

32

出土遺物（III）

図版23


33

34

35

37

38

36

39

40

41

42

43

44

45

46

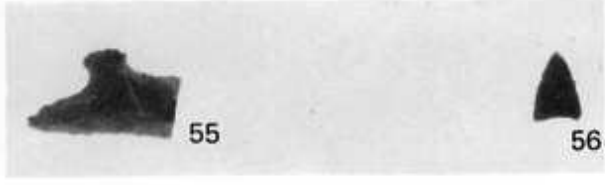
47

50
51
52

53
54
57

48

49


55
56

出土遺物(Ⅳ)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第46集

行年（ゆきとし）遺跡発掘調査報告書

発行日

昭和60（1985）年3月31日

編集・発行

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

733　広島市西区観音新町4丁目8-49

ＴＥＬ　(082) 295-5751

印刷　三光印刷株式会社